早稲田大學教授 大山郁夫著

民族と階級

科學思想普及會

②

陽明學ヨリ攝東的ナルモノト思ふ

言換ヘ程ヲ良能問題ヲ百折へ

ルモノ（新巳當所ノ名ヲ留ム）

擬ノ上ニテノ物哉

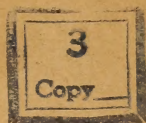
倭俊

Ōyama, Ikuo.

科學思想叢書
3

早稻田大學教授
大山郁夫著

民族と階級

科學思想普及會出版

はしがき

民族及び階級――並にこれらの兩者の間の相互關係――に關する理解を得ておくことは、現代に於ける各種の社會問題を聰明に考察するための必須條件の一つである。殊に我々が各種の社會問題の政治的方面に立ち向ふときに、我々はその必要を一層痛切に感じるのである。

この小さきパンフレットでその必要を完全に充たさうといふことは、無論不可能なことである。それは、誰れよりも、著者自身が最もよく知つてゐる。けれども著者は、少くとも、民族及び階級の問題の最重要點の或るものには一指を觸れたつもりでもあれば、同時にまた、さうすることに依つて、社會問題及び政治問題に關する我國の文獻に於て可なり閑却せられてゐるこの方面を幾らかは開拓したつもりでもある。たゞ著者は、このパンフレットに於て當然取扱

ふべくして取扱はなかつた諸點の多かつたこととか、或は折角取扱つた諸點に就いても、その取扱ひ方が未熟且つ粗雜であつたこととかは、何等の割引なしに十分に承認する。そして著者は、他日を期して、かうした多くの缺陷を補塡しようと考へてゐる。卷末附錄の『社會科學に對する興味の擡頭』といふ小論文は、その內容が甚だ貧弱なものではあるが、もと〱埋草にもといふほどの意味で附け加へたものである。若しそれが幾分でも讀者諸君の參考になれば、著者に取つては、文學通りに望外の仕合はせである。しかし著者は、『社會科學とは何か?』といふ問題に關する通俗的說明を起稿しようとして、目下多少準備しつゝある。そして、それはおそらく、今から數個月後に、科學思想普及會の手に依つて發表せられるであらう。

五月下旬　　　　著者

民族と階級　目次

補　論

科學思想叢書刊行に就いて

現代人は、より幸福なる社會的生活への第一步として、まづあらゆる傳統的迷信、魔術的信仰から解放されねばならない。これがためには近世科學に立脚する學問、思想が一般に普及されねばならない。然るに今日の出版物の殆んどは無產階級の大衆にとつて或は高價に過ぎて購ひ易からず、或は難解にして近づき難い。かくして科學思想の普及は時代の要求として高調されるにも拘らず無產大衆に緣遠きものとされてゐる。

科學思想叢書はこの滿たされざる時代の要求に幾分の寄與をなさんとして生れ出たのである。從つて本叢書は解し易い本、內容の充實した本、値の安い本、これをモットーとする。而して讀者の要求の續く限り繼續して刊行するものである。

一九二三年三月

科學思想普及會

民族と階級

―現代政治に於ける民族と階級との關係―

早稻田大學教授　大山郁夫著

第一章　序論

『戰爭を終熄せしめる戰爭！』――"The war that ends war!"

エッチ・ジー・ウェルスだつたかの著書の題名から拔け出して來たらしいこの合ひ言葉は、聯合側諸國民間に於て、過ぎ去つた世界大戰を特徴づける記號とし

て、至極重寶がられたやうに見えたものであつた。それは、平和を愛好すると稱する善良なる人々に依つて、絶えず叫びつゞけられたものであつた。それは『永久平和』への熱烈なる憧憬を表白する標語として、常に愛用せられたものであつた。それは、それ故に多大の同情を以て聽かれた言葉であつた。

しかしながら、同時にまたそれは、如何にも早急に、如何にも輕卒に、若しくは今少し露骨にいへば、餘りに無省察に、餘りに無分別に放たれた言葉ではなかつたらうか？無論、いづれの時代のいづれの國にも、對外戰爭の進行してゐる眞最中には、敵愾心の波の畝つて行くまにまに、平時には聞かれないやうな沒理性的な言葉が、相當に思慮深いと考へられてゐる人々の間にすら、叫ばれるやうなことがあるのは、決して珍らしがるべきほどのことではない。世界大戰の繼續中に於て、聯合側の方面に於ても、同盟側の方面に於てと同樣に

諸大學の學者教授たちまでが、街頭の群衆と調子を合はせて、今日から見れば唯一片の愛國心若しくは擬愛國心が產んだ大なる偏見の標本としか思へないやうな樣々の意見を、平氣で、しかも異常の熱心さで、高唱してゐたやうなことがあつたのは、いまだに我々の記憶に殘つてゐることである。けれども、かれも一時、これも一時で、さういふことの殆んとすべては、今となつてみれば、最早過ぎ去つた夢となつてゐるか、若しくはなりかけてゐるのである。そして、それらのうちで我々がまだ全然忘れ切らないでゐるものでも、大抵は、みな理性だけで生活を整理して行くことが、地上に住む人間の誰れもにとつて、如何に不可能なことであるかを證明してゐる實例位なものとして、我々の記憶の上に幾分大切に保存されて居るやうな種類のものばかりにすぎないのである。

　さういふものを、私は玆で一々洗ひ立てしようとしてゐるのではない。殊更

ら、さういふものが最早、唯だ過去の事件として眺められるだけのものとなつてゐる場合には、我々がそれに取合つてゐるには、現代に置かれた我々の生活が餘りに忙しすぎる。が、さういふものゝうちにも、單に過去の事件としての意味があるばかりでなく、同時に我々が將來に於て早晩遭遇しなければならない諸問題の解決に密接なる關係のあるものが屢々あることは、我々が承認しなければならないことである。さういふ種類のものに對しては、我々は單に我々の生活が忙しすぎるといふ理由だけで、冷淡に構へ込んで居る譯には行かない。我々は必然的に、活きた問題に對する注意を、さういふ種類のものに向ける衝動を感じないで居られないのである。

さういふ種類のもの丶一つとして、私は本書の劈頭に於て、世界大戰の繼續中に於て、少くとも聯合側諸國民間での流行語になつてゐた『戰爭を終熄せし

める戰爭！』といふ文句を回想して、それに私の注意を集中しておいた。そして私は、それは餘りに無省察に、餘りに無分別に放たれた言葉ではなかつたらうか？といふ疑問を附け加へておいた。無論、それは人々が戰爭熱に浮かされてゐた際に思はず發した言葉であつた。從つてそれは、戰爭の終結と共に忘れられたやうに、人々の口の端から消えて行つたものでもあつた。けれどもそれは、それ自身のうちに或る蠱惑的な響きを持つてゐるものであるから、いつ何時油斷してゐる人々を襲うて、再び彼等に取り憑くかも知れないといふ危險性のある言葉である。それ故に我々は、それが一時人々に忘れられてゐるからといつて、それをそのまゝに打棄てておけるものではない。否、我々は寧ろ、それが人々に忘れられてゐる間にこそ、それを取り出して來て冷靜にその本體を凝視し、そして若し我々がその存續が許さるべきものではないといふ理由を

發見したならば、今のうちに、それを根こそぎ苅りつくしておくべきものである。そこで私は先づ、それに對して右の疑問を向けた。と、斯ういつたやうな次第である。

第二章　戰爭と平和との關係

無論、私の右の疑問は、かのキリスト教の聖典中の有名な文句である『劒を以て興るものは劒を以て滅ぶ』といつたやうな種類の警句から出て來てゐるものではない。かういふ種類の警句は、概ね皆、それを發するものゝその場その場での即興的な、主觀的見解の產物にすぎないのを常とするものであるから、我々はそれを客觀的眞理の表白を目的とする、科學的說明と一樣に取扱ふことが出來るものではないものである。で、縱しまた假りに、さういふ警句が或る

科學的說明と合致してゐる場合があるにせよ、少くとも客觀的眞理の探求者としての立場からは、我々は率直に前者を棄てゝ後者に就くのを當然とするのである。我々はどこまでも、警句には警句としての意義以外の意義を認めようとはしないのである。

が、右に示したやうな宗教的立場から全然離れて、もつと科學的な立場から――若しくはもつと常識的な立場からでも――考へて見ても、我々が『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふやうなものゝ成立の可能性を疑ひ得る根據は、確實に存在して居るのである。もつとも人類生活上の所謂『原始時代』に於ける異種族間の戰爭の場合に屢々起つたと想定され得る通りに、勝ちほこつた種族が敗北した種族の總員を鏖殺ろしにしたやうなことが、現代の諸國家間の戰爭に於ても再現され得る可能性があるものとすれば、或ひは戰爭に依つて戰爭を

終熄せしめ得るやうな機會が全然起り得ない譯ではないとは言へるであらう。がしかし、實際上さういふことが起り得た時代は、少くとも『文明人』――かういふ表現が肯定され得るか否かの問題を離れての、通俗的慣用的意味での――が、その歴史の行程の上に於て遙かの後方に見殘して來たところのものであつて、さういふことが今更ら我々の眼前に再現されようなどゝは、夢想だも出來ないことである。

その上、原始的諸種族間の戰爭に於て右に述べたやうなことが起つたにしたところで、さういふ場合でも、その戰爭が終熄せしめ得たものは當該諸種族間の戰爭たげであつて、それは一般に戰爭といふものを終熄せしめたのではなかつたのである。否、さういふ場合に於て一の種族をして他の種族を征服し鏖殺するに至らしめた原因は、更らにその種族の上に働きつゞけて、それをして更

らに他の種族と戰爭するやうに導いて行つたのは、いふまでもないことである。かくて、少くとも過去から現在に至るまでの人類の歷史の敎へるところでは、戰爭が戰爭を終熄せしめたやうなことが、唯の一度だつてあつた例めしがないばかりではなく、寧ろ一の戰爭は例外なく他の戰爭の種子を播く役目を務めて來たものである。無論、一の戰爭と他の戰爭との中間には、場合々々に應じて長き若しくは短き平和の期間が見られたのは普通であつたが、しかしそれは諸交戰國の息繼ぎのための休憩時間と言つたやうなものにすぎなかつたのであつた。かういふ譯で、昔から今まで、戰爭と平和とは、常に相表裏の關係をなして來たものである。

人類が人類として經て來た無限に永き過去の期間に於て、或る時は多くのホルド(原始的放浪群)の間に於て行はれた衝突若しくは融合の裡から部族とか民

族とかゞ發生し、或る時は部族間若しくは民族間の征服被征服の關係の裡から國家が形成せられ、或る時は諸國家間の征服被征服の關係の裡から幾多の國家の隆替興亡とか新陳代謝とかの夢幻劇が繰り返された。かういふ變化極まりなき場面を次々と追うて來て、遂に最後に我々の眼前に起つた世界大戰までを見て來た我々の印象の上に最も深く彫りつけられて殘つて居るものは、人類の歴史は戰爭の連續であるといふ、屢々繰返された套語の間違つてはゐないといふ確證だけである。

我々は、現代に於ても世界の交通路の片脇に取殘されたまゝ存續して居る各處に於ける野蠻人の諸種族の生活狀態に關する記錄を讀むごとに、いかに群と群との間に於ける間斷なき戰爭が、彼等の生活の大部分を占領してゐるかの事實に驚かされる。そして我々は、先づこの事實から類推しても、一般の人類生

活の原始時代に於て、ホルドとホルドとの間に、若しくは部族と部族との間に戰はれて居た戰爭が、いかに普遍的な現象でもあれば、また如何に間斷なき年中行事でもあつたかを考へさせられない譯には行かない。けれども同時に我々は、さういふことが、單に原始社會、若しくは我々の時代の野蠻人の諸種族間に限つての出來事だと決め込んでしまつてはならないのである。換言すれば、我々は、我々の時代の所謂文明諸國民が、さういふ不斷の戰爭狀態を既に疾くに通り越してしまつて、全然別の境地に入り込むやうになつて來てゐるものと早斷してはならないのである。

いかにも、我々の時代の所謂文明諸國民の生活の外部的諸條件が、原始的若しくは野蠻的生活のそれらとは、非常に懸け離れたものになつて來てゐることは、明かなる事實である。が、それにも拘らず、少くとも戰爭中心の群團的生

活の續行といふ一點に關しては、我々の所謂『文明』生活は、實質上、その主要點に於て、原始的若しくは野蠻的生活の面影をそのまゝに保存して來てゐるのである。無論、我々所謂文明諸國民の仲間に於ては、戰爭の單位としての群團の範圍も擴大してゐれば、戰爭の方法も『進步』して居るし、また戰爭に用ひられる器具も精巧になり、『科學的』にもなつて來てゐる。しかし、原始的若しくは野蠻的生活に對してのさういふ變化といへども、その根本的事實である戰爭そのものを少しも左右してはゐないのである。若し我々の時代に於て戰爭と戰爭との中間に橫はる平和の期間が非常に長くなつたといふことが言ひ得られるならば、同時にそれに對して、戰爭の場面の範圍が極度に擴大してもゐれば、またその慘害の程度が無限に增進してゐることなども、直ちに擧げ得られるのである。

かう考へて來ると、少くとも戰爭と平和との關係を中心として見れば、現代の文明人らの生活の原始的若しくは野蠻的生活と異つて居る點は、寧ろ單に量的のものにすぎないのであつて、それは決して質的のものでないと言ふことが出來るのである。ところが、過去に於ては、前にもいつた通りに、戰爭は戰爭を終熄せしめたものであつたよりは、寧ろ一つの戰爭は他の戰爭を誘發したものだつたのである。だとすると、無限に永き過去の期間を通じて一貫して行はれてゐたこの原則が、現代に到つて急にその適用性を失つて、却て戰爭が戰爭を終熄せしめるといふ新らしき原則に依つて取つて代はられたのだといふやうなことは、我々には眞面目に考へ得られないことである。少くともそれは、論理的には言ひ得られないことである。

否、それは單に論理的に言ひ得られないことである許りではなく、世界大戰

終結の時から今日に到るまでの僅々數年間に起つて來た幾多の國際的事件から歸納しても、また實證的にも言ひ得られないことである。我々は既にヴェルサイユに於ける平和條約締結の瞬間から、再戰の脅威がヨーロッパ全土の上に臨みそこから延いて全世界の上に及んでゐたのを感じた。のみならず、時としては戰爭が既に脅威といふ程度を通り越して、現實の問題となつた場合をさへ見たのである。

最近トルコとギリシャとを中心として起つた近東に於ける葛藤の如きは、即ちその一例であつて、それに次いで暫らくの間世界の視聽を集めたロザンヌ會議は、實に主としてその跡仕末をつけるために開かれたものである。

ところが、この會議がまだその不安な進行をつゞけてゐた眞最中に於て、例の數年間の懸案である賠償問題を處理するためのパリーに於ける四國首相會

議が決裂して、フランスは直ちにその年來の主張に基づいて、ルール地方に對して軍事的占領を斷行したといつたやうな飛報が、世界の各部に傳へられた。フランスのこの行動は、如何にヴェルサイユ條約中の條項に立脚して居るものとはいへ、それを現在の國際的情況の下に實行しては、不測の禍機を促進する可能性を有してゐるものであることは、誰れにも容易に認められることである。少くとも、若しそれがヨーロッパの救濟の事業のためにアメリカを釣り出すといつたやうな効果を擧げ得ない限りは、その直接に今後のヨーロッパの國際關係の上に惡化的影響を及ぼす程度は、測り知られないものがあるのは明白である。

これらの事情を考へたゞけでも、過ぎ去つた世界大戰は、その當時多くの善良なる人々が期待して居た通りに、『戰爭を終熄せしめる戰爭』としてその局を

結んだものでは決してなく、寧ろ他の戰爭の種子を蒔くための戰爭としてその行程を始めたものとしてさへも見られなくはないのである。まだその上に、若し我々が、諸交戰國の或るものには終生癒やし難い怨恨感情を與へ、また、それらの如何なるものにも何等の滿足を與へ得なかつたヴェルサイユ條約の其後の成り行きに纏綿する一切の事情を綜合して考察する時には、さういふことの當然であることが、一層明白に我々に感じられるのである。

我々は『永久平和』に對する我々の熱情のために、現在のあるがまゝの事實に故意に眼を塞いではならない。そして、苟しくも我々がさうしない限りは、我々は少くなくとも、右の諸事實だけは容認しなければならないのである。そして、それから來る我々の結論は、戰爭を終熄せしめ得るものは戰爭でなくて、若し戰爭といふものが何時かは人類生活から全然取り除かれ得るものならば、

それは戰爭以外の或るものに依つてでなければならない、といふ一事に歸着するのである。

第三章　社會生活の根本原理と戰爭

世界大戰の進行中に於て、『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふ標語が盛に流行してゐた事實の裏面には、無論多くの現實政治家等の策略も手傳つて居たことが認められる。彼等は戰爭遂行に附帶する重き負擔の下に喘えぎながらも、それぞれに自國の參戰理由を、合理的に且つ道德的に粉飾する仕事を怠らなかつた。で、誰れもが知つてゐる通りに一方に於て『オートクラシーに對するデモクラシーの戰ひ』といふ叫び聲が擧げられたかと思ふと、他方に於ては『商業主義に對する人道主義の戰ひ』といふ標語が揭げられた。といつたやうなことも

ありがちであつた。時としては、交戰團體の兩側の諸國民が一樣にその前に拜跪する『唯一絕對の神』に向つて、彼等が互に相手の不正不義を訴へ、双方から相手の敗北を祈願して、その『唯一絕對の神』をまごつかせたやうな滑稽さへあつた。

しかしながら、交戰團體の兩側に於て行はれたかういふ種類の實際上の宣傳的政策の外に、我々は多くの理想家たちが、人類の社會生活上の根本的改革の希望を、世界大戰の結果の上に繫いでゐた事實のあつたことをも拒むことが出來ないのである。如何にも、大戰後の世界には、樣々の變化が現はれて來たことは事實である。しかも、さういふ變化の中には、世界歷史上の大變化だといひ得られる程度のものも、少なからず現はれて來たこともまた事實である。そこには、領土の移動もあれば、國境の更新もあつた。そこには、新國家の建

設もあれば、舊國家の崩壞もあつた。そこには、强大國家の地位から弱小國家のそれに急轉直下して行つた國々もあれば、またそれとは反對に、却てより良き地位に進んで行つた國々もあつた。そこにはまた、驕つて居たものが辱しめられたり、榮えて居たものが衰へたり、囚はれて居たものが放たれたり、踏つけられたて居たものが起き上つたりしたといつたやうな各種多樣の悲劇喜劇が入り交はり立ち交はつて展開されて來た。中にもロマノフ家や、ハップスブルグ家や、ホーヘンツォルレルン家やの沒落とか、勞農ロシアの崛起とか、新ドイツ共和國の形成とかの如きものは、特別に顯著に色彩づけられた現象として算へられるべきものであつた。

かういふものは、何れとして世界歷史上の大變化といふことが出來ないものでないことは事實である。それは、如何なる人々も、否定することが出來ない

事實である。しかしながら、かういふ變化のすべてが、多くの理想家たちが描いて居たやうな、戰爭の行はれるのを常態とする世界から戰爭のない永久平和の世界への轉換の一時期を劃するやうな根本的變化を代表するやうな種類の變化であつたか否かといふことは、それは全然別問題だとしなければならないのである。

我々が此問題に對して否定的に答へるのを待つまでもなく、大戰後に生じた國際政治上の多くの新事件は、さういふ理想家たちの懷いて居た希望が、畢竟一片の空想に過ぎないものであつたことを、殆ど無慈悲といひ得られる程度の明確さを以て我々に指し示した。で、それらの理想家たちのうちの不眞面目なる人々は、無論、彼等自身が當時に於てさういふ希望を懷いて居たといふ事實を全然好都合にも忘却しても居ようが、しかし彼等の中の眞面目なる人々は、

今となつては、現實曝露の悲哀を痛切に味はつて居るのである。が、それは彼等が甘受しなければならない當然の運命なのであつて、それに關しては、大戰後の事件の進行が責任がある譯ではなく、寧ろ彼等自身の當初からの違算が責任があるものだ、といはなければならないのである。

といふのは、斯ういふ譯である。――元來、人類生活が戰爭の行はれるのを常態とする世界から戰爭のない永久平和の世界へ移轉して行くといふやうな種類の變化は、社會進化の過程に於ける一新段階の出現を意味するものである。即ちそれは、社會進化の過程の上に、一派の社會學者らの所謂『動的變化』――dynamic change――の起ることを前提とするものである。從つてそれは、一方に於ては、社會進化の過程の上に於ける從來の惰性的もしくは習慣的進行の突

然停止することを意味すると同時に、他方に於ては、その同じ社會進化の過程の上に全然新たなる進路の開始されることを意味するものである。手短かにいへば、それは社會生活の根本原理の徹底的革新を意味するものである。しかもかういふ社會生活の根本的原理の徹底的革新は、社會組織の根本原理の徹底的改造に依つて先立たれるべきことを、その必須なる前提條件とするものだといふこともまた、誰れもが當然のことゝして認めなければならない筈のことである。

ところが、社會組織の根本原理の徹底的改造が、如何なる種類かの戰爭に依つて招來され得るものであるか否かの問題は、戰爭そのもの丶社會進化の上に於ける作用の考察に依つて、始めて解決せられるべき問題である。即ち若し、戰爭は今後の社會進化の過程に於て右に述べた意味に於ける『動的變化』を持

ち來たす可能性を有するものだといふ見極はめがつく時には、例の『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふやうな標語にも、始めて實質的內容が伴ふものだと見做すことが出來るものであるが、しかしながら、萬一さういふ見極はめがつかない場合は、さういふ標語は、單に空景氣のいゝ、しかしながら何等の實質的內容をも持たない、一片の警句に過ぎないものだとしなければならないものである。

けれども、戰爭が果して今後の社會進化の過程の上に、右に述べた意味に於ける動的變化を持ち來たす可能性を有するか否かの問題を解決する前には、我々は先づそれが過去の社會進化の過程の上に於てどういふ作用を成し遂げて來たかの事實を究めなければならぬ。社會進化概念の立場から見れは、現在は過去の繼續であり、將來は現在の延長である。この見地からして我々は、戰爭が

將來に於てなすであらう作用は、それが過去から現在までに示して來た作用の繼續であり延長でなければならぬ、といふことが出來るのであるゝであるから私は、戰爭が過去から現在までに示して來た作用に關する考察を、どれほど手短かにでも、一應次に試みてみるのが、私に取つての當然の順序だと考へるのである。

第四章　社會進化に於ける戰爭の作用

我々は、曾ては戰爭といふものが社會進化の過程の上に於て或る種の動的變化を激成する媒介物となつて働いたことのあるといふことを想定することが出來る。即ち、曾て人類の集團生活が、原始的血族團體の生活樣式から、如何なる形式かに於ての國家的支配の下に於ける生活樣式へ移つて行つた――若しく

は移されて行つた――過程の上に於て、戰爭はさういふ轉回期を促進する要素としての働きをしたものだと考へ得られる理由があるのである。

社會進化を說明する多くの學者達の述べるところに從へば、現在の社會科學的知識を以て溯源的に究め得られる限りの人類生活上の原始時代に於て、そこにまだ如何なる原型的形式に於てさへもの『國家』といふものゝ體制が發生してゐなかつたところでは、各個の人類集團生活の單位は、血族意識の根據の上に結合されてゐた共產的生活團體だつたのである。かういふ血族的共產團體は、その內部の總員の協力に依つて、食物の搜索獲得といふやうな經濟的行動や、對敵共同防禦及び共同攻擊といふやうな軍事的行動のために集團生活をして居たものであつた。そしてかういふ團體は、その生活狀態から、しばしばホルド――horde――の指稱の下に呼び做されてゐるものである。かういふホルド

の多くの合同の裡から、次第に部族――tribe――が成立するやうになつたものと考へられるものである。

この點に附隨する樣々の現象に關する考察は、私の本書の主題の闡明のために直接の關係のないことであるから、茲ではそれを一切省略することゝするが本書の立場から差し當つて必要なことは、さういふ原始的集團生活の單位――若しくは簡單にいへば原始的社會群――の成立の根本原理と、如何なる形式かに於ての國家組織の成立の根本原理との間に於て表はれてゐるところの、一の極めて重要なる根本的相異點に觸れることである。もつとも、この點に關して私が取つてゐる見解については、拙著『政治の社會的基礎』の序論中に於て、それを比較的詳細に示しておいたから、茲では重ねてそれを說明する勞を省くことにする。がしかし、私は純粹に本書の必要を充すだけの範圍內に於て、最

も簡短な形式で、その核心となつてゐる要點を茲に摘記しようと思ふが、それはつまり、かういふことに歸着するのである。すなはち我々は、原始的血族團體の內部に於ては、そこに自然的不平等の現はれの外には、制度化された不平等——殊に制度化された階級的不平等——の現はれを認めることが出來ないのであるが、之に反して、如何なる形式かに於ける國家組織の內部に於ては、そこに自然的不平等の現はれと共に、制度化された不平等——殊に階級的不平等の現はれが併存して居るのを認めるのである。そしてまた我々は、原始的國家に於ける制度化された階級的不平等の最初の形式は、實に奴隷と自由民との差別的地位に於て、これを見ることが出來るのである。

如何なる形式に於ける國家組織にせよ、苟くも國家組織と名づけ得られるものゝ最も顯著なる特徵は、其內部に必ず支配階級と被支配階級との二つの集團

があるといふ事實そのものである。そしてまた、支配階級が被支配階級に比して常に遙かに少數の人員から成り立つてゐるといふことも、例外なく、國家組織の標識の一つとして見ることが出來るものである。それは、その政治的意味からいへば、統治階級と被統治階級との差別であり、またその經濟的意味からいへば、搾取階級と被搾取階級との差別である。しかも、この經濟的意味は、常にその政治的意味の根柢をなすものである。それからまた、歷史的見地からいへば、支配階級と被支配階級との差別は、原始國家に於ては自由民と奴隷との關係に於て、中世紀的封建國家に於ては武士の集團と農奴との關係に於て、近代的資本國家に於ては資本階級と無產勞働階級との關係に於て、といふ風にそれぞれに最も極端な對照をなして現はれて來たものである。

さて、人類の集團生活が、當初の制度化された階級的不平等の存在してゐな

かつた血族的生産團體の生活樣式から、さういふ階級的不平等の必然的に伴つてゐる國家的支配の下に於ける生活樣式へ移つて行つたといふやうなことは、一體何ういふ動力に依つて促進されたものであらうか？　それは無論、國家契約說のやうなものでは說明が出來ないことである。各人の自由意思の撰擇に基く契約に依つて、或る集團内の大部分の人々が自ら進んで奴隸の苦役に就くといつたやうなことは、眞面目に取合つてゐるには餘りに馬鹿々々しい說明である。またそれは、それに關して屢々引合ひに出される分勞說に依つても、少くとも最終的の說明を與へることが出來ないものである。即ち、或る集團の生活に於て如何に分勞が必要であるにせよ、そこに何等の强制がない場合に、その集團内の多數人が自ら挺身して、異常な苦艱の伴ふ屈辱的な、そして酬ゐられることの少い仕事に從事しなければならない地位に就くといふやうなこと

があるといふのもまた、餘りに超理的若しくは沒理的な說明である。

かういふことを考へてゐると、結局我々は、さういふことが起るのは、諸集團間の——若しくは諸社會群間の——戰爭及びそれに伴ふ征服被征服の關係から來たものだといふ斷案に到達しなければならないのである。我々は既に、人類生活上の純粹の原始的段階に於ては、群と群との間の衝突は、征服群が被征服群を鏖殺するといふ樣な結果を伴つたことのあつたものだつたといふことを認めた。けれども其次の段階に於ては最早、征服群が被征服群を奴隷として活かして置いて、其上に手きびしき手足の勞働を强制する方が、結局自群のためにも利益だと考へる樣になつたといふことは、容易に想像し得られることである。無論さういふ場合が生ずるためには、そこに骨の折れる繼續的勞働を必要とすると同時に、さういふ勞働からの收益も相當にあるといつたやうな種類

の産業――たとへば或る程度に發達した牧畜業とか農業とかのやうな――が既に發見せられてゐて、そしてそれに對する人手の入用なことが征服群によつて痛切に感じられてゐたといふことを以て、その必須なる前提條件とすることはもとよりのことである。かういふ關係から、我々は同時にまた、經濟生活の進化の狀況が、一般の社會進化の過程の上に於ける動的變化と密接なる關係に立つてゐるものであることをも、認めないわけにはゆかないものである。

最後に、私が上に用ひて來た『社會進化の過程の上に於ける動的變化』といふ言葉の意味について、茲で一言を附け足しておきたい。同じ根本原理の上に繼續的に存在する社會組織の内部に於て起る各種の變化は、それらが如何に人類生活樣式の『改善』の上に重要なる意義を有してゐるにせよ、我々はさういふ變化を『動的』のものと呼び倣さうとはしないのである。我々は寧ろ、さう

いふ變化を、一定の社會組織の靜的狀態の完成の方向に向つて働く漸進的變化と見るのが適當だと考へる。尤も、かういふ漸進的變化は、暗々裡に、續いて起らうとして居る『動的變化』の準備的過程だと見られる場合があり得ることは事實である。が、それにしても、その漸進的變化そのものは、『動的變化』だといふことは出來ない。我々が『社會進化の過程の上に於ける動的變化』と呼ぶものは、專ら、社會組織の根本原理そのもの丶上に起る變動に關聯してゐるものである。少くとも私自身は、本書に於てそれをさういふ意味に用ひてゐるのである。そして私は、私の主題に對しては餘りに短かすぎる上來の說明に於ても、戰爭といふものが過去の社會進化の過程の上に於ける動的變化を激成することに於て示して來た作用の輪廓だけを、私自身の立場から描いたつもりである。

そこで私の次の仕事は、曾て社會進化の過程の上に於ける動的變化を激成するために重要なる役目を務めて來た戰爭そのものが、今後の社會進化の上に於ける動的變化を惹起する上にも同樣の働きをする力を持つてゐようとは考へ得られない、といふ一點を闡明することである。少くとも私は、戰爭それ自身單獨にはさういふ力を持つてゐないといふことを證明しようとして居るのである。そして、この問題に關する私の考察の中心點を豫め要約すれば、かういふことになるのである。――すなはち、戰爭及びそれに伴つて來た征服被征服の關係は、今日に於て見られるやうな、統治被統治の關係を中心とする國家的支配の下に於ける社會生活樣式を誘導する動機となつて來たものであるが、かういふ意味に於ける戰爭そのものが、それ自身が過去に於て誘導して來た今日の國家的支配下の社會生活樣式を將來に於て絶滅する作用を示すやうにならうなど

といふことは、論理的に期待が出來るものではない。少くとも、別に他の何等かの社會的原因が新たに加へられるのでなければ、戰爭がそれ自身で從來追うて來た進路から急激に一轉して、將來に於てさういふ作用を新たに示すやうにならうなどとは、論理的に期待が出來るものではないのである。萬一、別に他の何等かの社會的原因が新たに加はつたので、戰爭がさういふ作用を新たに示すやうなことになるものとすれば、その場合には我々は、その新たに加はつた社會的原因が何であるかを明かにしなければならないのである。私はそれらの諸要點を、現在の國際政治の上にも尙ほ强い力で働いてゐる民族關係及び階級關係に關聯して考察しようとしてゐるのである。

第五章　國家組織の形式

國家組織は、如何なる形式を以て現はれる場合でも、常に統治被統治の關係の上に立つて居るといふ點は、その發生以來、終始一貫して渝らないものである。それが、國家組織といふものゝ最も顯著なる特徴であることは、私は前に既に述べて置いた。が、國家組織は、これをその形式といふ點から眺めた時には、無論一定の徑路を追うてゞはあるが。樣々の變化の諸段階を經て來たものである。我々は、原始社會に於て部族組織の形成されて居たところに、そこに既に國家組織が少くともその原型的形式に於て萠芽を發して居たのを見ることが出來るのである。さういふ時代からこのかた、歴史の上に現はれて來た國家の形式としては、古代の『都市國家』とか、『世界國家』とか、中世紀に於ける『封建國家』とか、近世紀に於ける『民族國家』とかを算へることが出來る。そして近代の『民族國家』が或る程度に於て資本階級の支配の下に來て居る場

合には、さういふものは普通『資本國家』の名を以て呼ばれて居る。無論、『資本國家』といふやうな名稱は、國家の形式に關聯してゐるものではなくて、國家内の權力の中心點の所在に關聯して居るものであるが、我々が茲で新たにそれに注意を向けることは、必ずしも無用のことではあるまい。それに若し、現在の勞農ロシアの如きものを『形成の過程に在る共產主義國家』と呼ぶことが出來るならば、これもまた、同樣の意味に於て茲で序に注意して置く必要があるものである。

で、國家組織の形式の上に或る變化が起るのは、常に戰爭及びそれに伴ふ征服被征服の事實を楔機とするものであり、また、一定の形式の下に於ける國家組織が存續する限り、その維持及び存續もまた、常に戰爭及び征服の成果としての權力の行使に依るものである。これは、原始的征服國家以來近代の民族國

家に到るまで、始終一貫して渝らなつかた徑路である。けれども、殊に『民族國家』の成立及び存續は近代の或る期間に起つて現代まで繼續して居るものであるから、それは我々にとつては特殊の興味のあるものである。ところが、かういふ近代的民族國家の成立にしても、それが如何に例外なく戰爭及び征服に負うて居るものであるかは、近代史を讀むものゝ嫌やでも應でも見逃がすことの出來ない事實である。これは、近代のイギリスに關しても、フランスに關しても、イタリーに關しても、ドイツに關しても、その他あらゆる民族國家といふ民族國家に關して、確實にいひ得られることである。同樣に我々は、近代日本の誕生をも、戰爭及び征服と引き離して考へることは出來ないのである。

一般に國家といふものゝ成立が戰爭及び征服に負うて居る通りに、——それから又近代的民族國家の成立が矢張り戰爭と征服とに負うて居る通りに、——

その民族國家の構成要素をなす民族そのものもまた、その成立に關しては、必然的に戰爭と征服とに負うて居るものである。

この點はかのウォルタアー・バジォットが、既に一八六四年に發表した著書の『物理と政治』に於て、適切に指摘したことである。彼は、原始時代の人間の群れが沒頭して居た仕事は『民族形成』の仕事であつて、そしてそれは實に彼等の間に於ける間斷なき戰爭に依つて成就せられたものだといふことを論證した。彼のかうした說明は、大體に於て當を得たものであつた。しかも彼が、自然法學の影響の尙ほ著しく、殘つて居た當時のイギリスの政治思想の上に、かういふ新方面を開拓したのは、確に大なる卓見だつたと稱することが出來るものである。たゞ彼は民族概念を種族概念と混同して、一民族は同一種族のものから成り立つて居るやうに說明したのが、その最も大なる誤謬だつたのである。

民族の發生は戰爭に負うことは無論であるが、それは異種族間の戰爭に負うものだといはなければ不充分な說明であることを免れないのである。

この點に關しては、私はグンプローヴィッツが一八八三年に公にした著書、『種族鬪爭』に於て、人種多元論（Polygenismus）の論據から與へて居る說明が最も啓發的であるやうに考へる。（グンプローヴィッツの『人種多元論』には反對論が隨分多いけれど﹅、私は今日までのところでは、それが最も有理な學說だと信じてゐる。）兎に角、今日に於ては、民族が種族と一致するものでないといふことだけは、政治學上の常識となつて居るものだと言つて、間違ひのないことである。

民族が種族と同一でないといふことは疑ひもないことであるが、しからば民族は何であるかの問題は、その解決が甚だ困難なる問題の一つである。現代の

政治問題の上に非常に重大なる意義を持つて居るものは何であるかといへば、我々は何よりも殊に民族及び階級を擧げることを躊躇しないのであるが、不思議にも、――或ひはそれは當然であるかも知れないが、――この二つのものは共に、それを正確に定義づけることが、非常に難しいものなのである。しかも民族の場合に於ては殊にさうであるやうに、私には考へられる。それ故に、それを定義づけようと試みる人々の中には、それは『何々であるか？』といふことに關して箇條を擧げる前に、先づ『それは何々でないか？』に關して箇條を擧げるといつたやうな方式を取るものが少なからずある。が、それと同時に、それは甚だ興味のある問題でもある。けれども、私は本書に於てこの問題を詳論して居る暇がないから、それは他の機會に讓ることゝして、こゝではたゞ純粹に私の論題に關係のある範圍内だけに於て、それに關する要點を飛び飛びに

述べることだけに止めて置かうと思ふ。

第六章　民族團體の意義

民族は、種族と同じものでない通りに、國家とも同じものではない。これは近世紀の歴史を動かした強き力の一つとして働いて來たところの、所謂『民族國家思想』——nation-state idea——といふものが、本來は、一民族が他民族の國家的支配から離脱して、自ら一國家を構成しようといふ政治的欲求を表白して居るものだといふ事實に依つても、直ちに判かることである。

また、民族は共國宗敎團體でもない。尤も、宗敎若しくは宗派が諸民族の離合關係の上に、重大なる影響を及ぼすものであることは、例へば、アイルランド民族とローマ舊敎との關係とか、バルカン半島上の諸民族とローマ敎會及び

グリーク教會との關係とかの上に於て、その最も適切なる例證を見ることが出來る。『アルスター地方の住民の大部分は、爾餘のアイルランドの諸地方の民族運動に向つて、反對の態度を取つてゐる。といふのは彼等が異種族に屬してゐるためでもなく、――尤も、同地方の北東部にはスコットランド人系の血が勝つてはゐるが、――また彼等が風俗習慣を異にしてゐるためでもなく、それは實に、爾餘の諸地方民が熱心なる『法王黨』であるに反して、彼等がイギリス國教會の信徒だからである。』『セルビア人及び、クロアート人の場合に在つては、宗教の相異が特殊の民族形成にさへ導いた。本來、クロアート人は、セルビア人と共同種族團體に屬してゐる。現今でも、セルボ・クロアートの名稱が殘つてゐる。また、クロアート人の言語は、セルビア語から轉訛したものである。けれども、今日に於て、彼等とセルビア人との再融合を妨げてゐるもの

は、宗教の相異である。即ちクロアート人は大抵はローマン・カトリック教徒であるに反して、セルビア人は、グリーク・カトリック教會の自治的分派であるセルビア教會の信徒である。』――（クノー著『マルクスの歴史・社會・及び國家學說』―下卷第二十二ページから）――けれども、それとも同時に、同一民族の内部に於ていくつかの異つた宗教若しくは宗派が並び行はれて居るといつたやうなことも、かなり普遍的に見られ得る現象である。

更らにまた、民族は共同言語團體だといふやうなことも、多くの人々に依つて、屢々主張されて居ることではあり。且つまたそれは、最も多くの場合に適用され得ることではあるが、しかしながら、それも常にさうと限つたものではないのである。我々は一方に於ては、イギリスとアメリカとの場合や、スカンディナヴィア半島上の二民族の場合に於けるやうに、同一の言語を話しながら、

違つた民族を構成して居るやうな實例を見る許りではなく、他方に於てはまた地方々々に依つて或ひはドイツ語を、或ひはフランス語を、或ひはイタリア語をといふ風に、少くとも三つの異つた國語を話しながら、一民族としての生活を平和的に生活して居るスウィス民族の如き實例——尤も、グンプローヴィッツの如きは、スウィスを多民族から成る一國家と見てゐるが——にも出遭うのである。たゞ共同の言語といふものが、最も多くの場合に於て、一民族間に民族的共同意識を普及せしめるといふ樣な心理的作用を、極めて敏活に行ふものだといふ事實は、我々が十分に承認しなければならないことである。

最後に、民族は『共同文化團體』だといふ定義は、今日に於ては相當に廣く受け容れられて居るものである。けれども、この定義にしても、我々から見れば、決して完全なものだとはいひ得られないやうに考へられるのである。少く

とも、この定義を受け容れるためには、我々はそれに關して様々の制限的說明を提出することを必要とするのである。我々が、この定義を受け容れようとする際に先づ第一に遭遇する難關は、共同文化の單位は、民族といふものよりも遙かに狹いものの上に目安を置くことも出來れば、またそれよりも遙かに廣いものの上に目安を置くことも出來るのであつて、必ずしも民族だけを共同文化の單位と見なければならないとするやうな確實な根據がないのである。我々は或る特殊の地方色に立脚した地方文化若しくは鄕土文化を認めることの上に何の支障を感じることもないのであるし、またそれと同時に、ヨーロッパ全土を其境域とするヨーロッパ文化とか、北アメリカ合衆國をその根據とするアメリカ文化とかを認めるといつたやうなことも、全然理由がないものとすることは出來ないのである。それからまた、文化を東洋文化とか西洋文化とかに分けて

見るやうなことの上にも、全然事實的根據の缺けて居る譯ではなく、更らにまた、或る見方からいへば、世界文化が現今に於て段々に形成されつゝあるといふことすらも、決して言ひ得られないことではないのである。その上、一定の地理的境域を離れて、その立脚地を或る集團生活の上に置くところの階級文化──ブルジョア文化とか、プロレタリアー文化とかいふやうな──を認めることも、少くとも現代の諸工業國の社會的環境の下に於ては、相當に有理に主張し得られることである。

かういふところから見れば、民族は無論唯一の共同文化團體だといふことが出來ないのは確かである。しかし、このことを言つてしまつた後にも尙ほ、民族はさういふ共同文化團體の一種ではないかといふ問題が、その後に殘るのである。そして、この問題に對する私の答へは、半ばは『然り』で、半ばは『否』

である。しかし、それを決定する前に、我々は先づ民族が共同文化團體の一つだとでもいひ得られるのは、一體どういふところから來るのであるかといふ問題を解決しなければならないのである。それは、約めていへは『民族文化とは一體何であるか？』の問題に歸着するのである。

民族文化は、一民族間に於ける或る種の共同の思想感情に立脚する所謂民族意識の裡にその基礎を持つものであるといふことは、それが大摑みな言ひ方であるだけに、反對の餘地もまた從つて少ない。けれども、同時にそれは、それ自身單獨では、さういふ共同の思想感情がどういふ原因に依つて釀成せられたものであるかを明かにして居るものではないのである。で、その原因を說明しようと企てる人々の或るものは、さういふ共同の思想感情は、一民族が常に同一の地理的境域の上に生活の根據を占めて居るところから、同一の地理的環

境の影響を受けて居る間に、自然とさういふ共同の思想感情を發生せしめるものだといひ、また他の或るものは、さういう共同の思想感情は、一つの歷史的產物であつて、すこし詳しくいへば、それは一民族の共同の歷史、共同の傳統、共同の光榮、若しくは共同の屈辱といつたやうなものから醞釀せられたものだといふやうに說明する。前者は、一種の『地理的決定說』ともいふべきものであつて、後者は一種の『歷史的決定說』ともいふべきものである。

第七章　民族文化の考案

右の兩說中の前者に從へば、一民族間の思想感情の流れはもとより、その全生活の方向までが、すべて皆住居の隣接から來る所謂隣保感情若しくは鄕土的精神に依つて決定せられる許りではなく、その周圍の地理的諸狀況、即ち例

へば氣候の寒暖とか、雰圍氣の乾濕とか、山川の起伏とか、地味の肥瘠とか、港灣の深淺とかいつたやうな、一ト口に地理的環境といふ名稱の下に包括され得る諸條件に依つて決定せられるものだといふのである。かういふ說を主張する人々は、一體に人間といふものは、個人としても集團としても、その全生活の上にその地理的環境の影響を印しないものはないといふのである。

彼等に從へば、例へば原始時代に於て山野の近くに住んで居たものは自然と狩獵生活を學び、河海の邊りに住んで居たものは期せずして漁業生活を學んだりして居た間に、さういふ生活樣式が無意識の間に彼等の精神とか氣風とかの上にまで影響を及ぼしたものであつて、そして人間生活の無限に複雜化して來た現代に於ても、地理的環境の影響は矢張り、各處に於て人間の生活を形づくる上に強き影響を及ぼして居るものである。かういふ譯であるから、所謂

民族性とか、民族精神とか、民族意識とかいつたやうなものは固より、かういふものから流れて出た民族文化もまた窮極に於ては、みな地理的環境の產物だとしなければならない。――と、大體かういふのである。

いかにも、人間の個人生活や集團生活が或る程度に於て、その地理的環境の影響を受けるものだといふことは、誰れもが異論を挾むことが出來ない事實である。がしかし、さういふ地理的環境の影響は、それを決して過大に見積つてはならないものである。人類文化の進化に關聯して地理的決定說を主張する人々の中に於ても、殊にバックルの如きは、その名著『イギリス文明史』に於て、地理的環境が人間の文化の上に及ぼす影響を極端に誇張して述べたものである。が、彼れが擧げた多くの例證には、いくらでも例外が擧げ得られるのを常とするのである。それから、民族の場合に於ては、それ自身が地理的環境

の影響で生活を左右せられることもあると同時に、反對にそれ自身で地理的環境の上に能働的に作用することもあるのである。此點に關して無限に多き實例の中からたゞ一つを擧げれば、例へばトライチュケがその『政治學』第一卷（此書には浮田博士の手に成る『軍國主義政治學』と題する和譯があつて、早稻田大學出版部から發行されてゐる。）の中の或る個所でいつて居るやうに、バルカン半島の諸地方が、古代のローマ帝國の管理の下に在つた間は、灌漑の行き届いた美しい沃野であつたが、それが後にトルコ人の行政の下に移つてからは、見る影もない瘦土となつてしまつたやうなことがそれだと言へるのである。一ト口に私の要點をいつてしまへば、それは、地理的環境が人間の個人生活若しくは集團生活の上に及ぼす影響は、寧ろ間接的のものであつて、決して根本的のものでもなければ、最終的のものでもない。といふことである。しからば

さういふ根本的のものであり、最終的のものであるものは何であるかといへばそれは、社會的經濟的原因から來る影響であるといはなければならない。このことは、多くの場合に於て、地理的決定説の主張者等の説明の裡に暗示せられて居ることが多いのである。たゞ彼等は、自己防禦のために、そこに直接に觸れることを恐れる許りである。

後者即ち歴史的決定説が說くやうに、一民族內の共同の思想感情は——從つて民族文化は——究極に於て歴史的產物だといつてしまへば、これも極めて大まかな議論であるだけに、それだけでは別に反對論を提出する餘地も少い譯であるが、しかしその代りにそれは、その所謂『歴史的產物』といふものが、詳はしくいへば何ういふことを意味して居るものであるかを、少しも說明して居るものでないのである。そこで、この傾向を代表する人々の多くは、一民族內

の共同の思想感情は、その民族の共同の歴史及び共同の傳統といふ總稱の下に包括し得られる諸條件の抱合の裡から流れて出たものだといふのを常とするのである。けれども、若し私が前に述べたやうに、民族といふものが少くともその起源に於て、直接間接に異種族間の戰爭の成果だとすれば、一民族の內には征服群と被征服群とが常に併存して居る筈でなければならぬ。詳しくいへば、そこには、優勝種族もしくはその後裔が支配階級としての地位を占めて存續してゐる筈であるし、また、劣敗種族もしくはその後裔が被支配階級としての地位を占めて存續して居る筈でなければならぬ。しかるに、かういふ征服群と被征服群との二つの集團に關して、共同の歷史とか、共同の傳統とかを說くのは甚だ訝かしいことではないか?——かういふ疑問は、必然的に彼等の所論に對して起つて來なければならない筈のものである。

この點へまでやつて來ると、我々は始めて、民族形成の過程に於て或る種の心理的諸要素が甚だ強く働いてゐるものであるといふことを注意するのが極めて必要であるといふ一點に氣附かざるを得ないのである。一民族内に於ける征服群もしくはその後裔である支配階級は、いふまでもなく、その當初の征服の成果である權力に依つて、被征服群もしくは其後裔である被支配階級を、その隷屬的服從の地位に繫ぐことに努力する。けれども、征服群が被征服群に對して示すものは、常に權力だけに限つたものだといふことは出來ない。まづ第一に、征服群は被征服群を他の優强群の侵略に對して保護することを怠らない。オッペンハイマーは、その著『國家』(此書には岡上守道氏の和譯があつて、大鐙閣から發行されてゐる。)の或る個處に於て、かうした關係を例證するために、熊が羊の群れを狼の襲擊に對して防衛したといふ昔噺を引いて居る。それは、

かうした見方の下におくことも出來るのである。

しかし、かういふことの外に、征服群はまた、何時もその權力を赤裸々に誇示するよりも、時としては、それを『恩情主義』とか、『和衷協同』とか言つたやうなもののオブラートに包むのが得策であるといふことを心得て居るのを普通とするのである。一言にしていへば、彼等は右手に鞭を持ち左手に林檎を握つて見せるとかいふ舊式の敎育者の態度を取ることを學ぶのを普通とするのである。かういふところから、彼等は事情の許す限り、多くの場合に於ては、威壓政策を採るよりも、寧ろ懷柔政策を行ふやうに導かれるのである。それは恰度、資本主義的社會組織の下に於て、搾取階級であるブルジョアジーが被搾取階級であるプロレタリアートに向つて、恩情主義とか協調主義とかを持ち出すのと同じ譯合ひなのである。

一民族內の征服群は、もともと、その政治的意味に於ては支配階級であるがその經濟的意味に於ては搾取階級である。けれども、彼等は彼等が搾取階級であるといふ事實を、出來得る限り隱さうとする衝動に驅られるものである。かういふ原因が他の多くの諸原因と結び附いて働くところに、或ひは征服群が被征服群の間に於ける才幹の優ぐれたものを政治上の樞要の地位に拔擢登庸するといつたやうなことが行はれたり、或ひは征服群と被征服群との間に嫁娶の道が開かれ、その實行が奬勵せられるといふやうなことが生じたり、或ひはまたその他の種々の社會的經濟的原因も加はつて來て、征服群と被征服群との間の雜居が益々頻繁にもなれば、兩者間の取引交渉が益々密接にもなるといふやうなことすら現はれたりするやうになることもあるのである。かういふことが久しく續いて行はれて居る間に、社會學者らの所謂『社會的同化』の過程が進行し

つゞけるものであるが、この社會的化同の進行する程度に應じて、一民族内の諸構成要素の融合作用が進行し、またそれに應じて民族的共同意識が明確になり、從つて民族文化ともいはゞいひ得られるものがその裡から形づくられて行くのである。

けれども、同時に我々は、近代的民族國家内に於ては、民族的共同意識が明確になつて行く傍らには、それを縱斷するブルジョアジー及びプロレタリアートの階級の對立關係が益々强烈になつて行く傾向のあることを見逃がすことは出來ないのである。かういふ階級的對立關係は、一民族内に於ける征服群と被征服群との對立關係とは、多くの點に於て著るしくその外觀を異にするものがあるに拘らず、その來歷に於ては前者は後者の後繼者であり、またその經濟的搾取被搾取の關係に立脚してゐるといふ點に於ては、兩者はまさに揆を一にし

てゐるものである。

第八章　民族意識とその政治的意義

右に述べた一民族内に於ける社會的同化の作用は、その民族が他の優强民族からの侵略の脅威を受けて居る場合に於て、最も强烈なる働きを見せるものである。それ故に、一民族内の支配級階は、他の優强民族からの脅威を受けて居る場合には、無論自民族内のあらゆる社會的經濟的勢力を糾合するために全力を盡くすのであるが、さういふ脅威の恐れるに足るほどのものがない場合でもなるべくそれを誇大に見せ掛けることに腐心するのである。かういふことは、一民族内に於ける征服被征服の關係の痕跡としての支配階級及び被支配階級の差別のある間は、到底避け得られないことである。かういふ譯であるところか

ら。現代に於ける諸民族内に於ては、支配階級が民族意識に政治的意味を結び附けることに極度に努力する傾向が、甚だ顯著に現はれてゐるのである。或る意味からいへば、民族意識は政治的意味を離れても成立ち得る可能性のあるものであるが、しかしながら現代に於ては、どこへ行つても、民族意識に政治的意味が結び附けられてゐないところはないのである。現代に於ける民族意識が非常に顯著に軍國主義的色彩を帶びてゐるのは、主としてこの理由から來てゐるものである。

私は茲で今一度、民族文化の問題に立ち歸りたい。凡そ一民族内に於ける支配階級は、その民族的存立の繼續が自階級に利益があるものであることを知つてゐるところから、極力民族意識の振興を謀ることを怠らないものである。殊に彼等は、その四周に隣接してゐる他の諸民族に對しては、自民族のすべての

構成要素が共同的利害關係の上に立つてゐるといふ點を高調するのを常とするものである。同じ原因から彼等は、自民族内に於て見られるあらゆる社會關係を、民族的共同意識の形成のために樣々に利用することを知つて居るのである。たとへば彼等は自民族内に於ける征服群と被征服群との間に漸次に婚姻關係が行はれるやうになつて、そしてその結果として同民族内に血族の混同が次第に增進して行くやうな事實を見れば、早晩必ずこの點を巧妙に粉飾して、その民族全體が共同祖先から繁殖して來た人間の一集團であるかのやうに取繕ふのである。かういふことは、各民族の起源が一般人に取つては邈として考ふべからざる太古に屬するものとなつて來て居る場合に於て、最も容易に行はれ得る可能性があるのである。民族が屢々種族と混同されがちなのは、主としてかういふ原因から來て居るものだといふのは、おそらく間違つた斷案ではなから

う。

同様に彼等は、結局は自階級の存立のために都合のよささうな眞正の、若しくは擬作の歴史的事實を、自民族の共同の歴史として四方に宣傳し、それを一般に流布せしめることに努力するのである。この點に關しては、その民族の他の隣接の諸民族に對する外交及び戰爭の歴史が、最もよくこの目的に適合する材料を無限に豊富に含む寶庫として見做されるのである。それは、民族の英雄、民族の救主、民族の共同の傳統、民族の共同の榮辱といつたやうなものゝ發祥地として、最も恰好なものと見做されて、大切に保存せられるのを普通とするのである。かくて、かういふ源泉から流れ出るものと見做される民族的共同思想感情なり、またその上に築き上げられるものと見做される國民文化なりは、その直相を穿つて見れば、結局はその民族内の支配階級が直接間接に創作し宣

傳したものである場合が、甚だ多いのである。

前にもいつた通りに、民族意識は、その本質上、必ずしも政治的意味を帶びるべきものとは限つてゐないのであるが、しかし現代に於ける民族意識は、どこへ行つて見ても、必ず政治的意味と結び附けられてゐて、しかも最も强烈な軍國主義的色彩を帶びてゐることは、掩ふべからざる事實である。それはしかし、上來反復して述べた理由に依つて、決して偶發的現象ではない。それは、最も手短かに言へば、寧ろ一の歴史的必然性の産物ともいふべきものである。で、若し將來に於て、民族意識が醇化される時期があるものとするならば、——換言すれば、若し將來に於て、民族意識からその政治的意味が取り去られて、民族文化が純粹に隣保的感情とか鄕土的精神とかに依つて結び附けられた一定地域上の民衆の全生活から流露するものとなるやうな時期が來るものとす

るならば、――それは支配被支配の關係の上に立脚せしめられて居る人間の社會生活の根本原理の上に徹底的變革が起つた後のことでなければならないのである。

右に述べた通り、民族文化は必ずしも一定の地域上の民衆の全生活から必然的に流露して出て來たものではなく、その民族內の支配階級の創作及び宣傳の結果として形づくられた部分も決して少くないといふ事實から來る當然の結果として、一民族內の支配階級が變はつて行くたびごとに、その民族文化の重要なる特徴もまたそれに伴つて變はつて行くといつたやうなことは、歷史上屢々その實例を見ることである。民族を一つの共同文化團體と見るとき、我々は決してこの點を無視してはならないのである。けれども今の私には、この點を詳述してゐる遑がない。たゞ私は筆の序に、私の知つて居る範圍內では、私が上に

一度引用したところのハインリッヒ・クノーの近著でもあれば好著でもある『マルクスの歷史・社會・及び國家學說』の中に、それに關して極めて要領を得た論證が載せられてあることを附け加へておきたい。（この點に關するクノーの論述の譯文を、『補論』として本書に載せておく。）

要するに、民族は一つの共同文化團體だといふ時には、我々はたゞ、それを絕えず形成及び變遷の過程の上におかれてあるそれとしてのみの意味に於て、理解することが出來るものである。

第九章　民族國家思想の概念

一民族が一國家をなすべきものだといふことを要求する所謂民族國家思想が近代史の方向を決定する上に有力に働いた諸要素中の少くとも一つであること

は、私は前に既にこれを述べた。しかし、この意味に於ける民族國家思想は、他民族からの國家的支配の下に繋がれてゐるところの所謂被抑壓民族が政治的解放運動を企てるところに於てのみ、極めて力強き作用を示すものである。ところが、かういふ被抑壓民族が一旦その政治的解放に成功して自ら一個獨立の民族國家を形成し、そして自らその國家内に於ける支配的權力の中心となつた以上は、かういふ民族は忽ち從前の態度を一變して、今度は自民族の手で他民族を抑壓するためにその支配的權力を行使するやうになる傾向に陷るのである。それは、少くとも二つの方向に沿うて作用する。即ち、かういふ民族は、一方に於ては自國内に包含せられてゐる他の弱小諸民族を抑壓することを圖ると同時に、他方に於ては、他の諸國家を構成する諸民族に向つて敵對性を示すのである。

もつとも、この敵對性は、單に戰爭の形式を取つて現はれるばかりでなく、平時の外交關係の上に於ては同盟とか協商とかのやうな平和的形式を取つて現はれることすらもある。けれども、戰爭といふものも、同盟とか協商とかいふものも、畢竟各民族の生存表現慾から流れて出たものであるから、それらは同じもの丶異つた現はれだといふことも出來るし。またそれらは相互に表裏の關係をなしてゐるものだともいふことも出來るのである。それ故に、『外交の果てが戰爭だ』とか、『對外交渉の成功不成功は結局その當事者の戰爭能力の多少の上に繋つてゐるものだ』とかなどゝいふやうなことは、一般に廣く言ひ慣らはされてゐる套語となつて來てゐるものである。

また、一國家の支配的權力の中心をなす優强民族が自國內の弱小諸民族に臨むに際しては、必ずしも抑壓を以て終始するものではない。それは屢ば、恩情

主義的政策とか、協調主義政策とかをも用ふるものである、殊にそれは、一民族内の支配階級が他の諸階級に向つてするのと同じ樣に、常に必ず所謂同化政策——婚姻政策とか敎育及び言語の强制的普及政策とかなどいふやうなものを通じての——を用ふるに決まつてゐるものである。それは、次のやうな原因から來てゐるものである。即ち第一には、民族といひ國家といふものは、それを他の民族なり國家なりに對立せしめて見せるときに於て、最も有效にその內部に於ける民族意識とか國家意識とかを强めることが出來るものだからである。それから第二には、民族といふものが戰爭及び征服並びにそれに續く社會的同化作用を通じて次第に抱合融和せられたる多くの異種族から混成せられるといふ過程の連續として、多くの異民族もまた、同樣の徑路に依つて、永き年月の經過する間には、一民族の形に鍛へ上げられるといふやうなこともあり得

るからである。少くとも、古來の歷史上には、さういふ實例が數限りもなく示されて來たのである。民族概念が一種の流動概念だといはれるのは、かういふところから來てゐるのである。たゞ近代に於ては、各民族の民族意識が非常に明確になるやうに發達して來たから、さういふことがこの上引續いて行はれ得る可能性が、殆んど絶無といふ程度にまで減退して來てゐるといふことは、事實として認めなければならないものである。

かういふ譯で、近代史上に於て重要なる役目を務めて來た民族國家思想は、今日に至るまで、どこへ行つても、まだ完全に事實として現はれてゐるのを見ないのである。で、今日に於てその國內の民族關係が比較的單純だといはれる國家でも、その內部には少くとも二三の民族が必らず抱合せられてゐるのを見るのである。今日の大國家が、大抵は皆、それぞれに多少の程度に於て自國內

の民族問題に惱まされてゐるのは、そのためである。かういふ意味に於て、世界大戰の收穫の一つとして現はれて出た『新民族國家』だと稱せられてゐるポーラーンドだとか、チェッコ・スロヴァキアだとか、ユーゴー・スラヴィアだとか言つたやうなものにしても、決して純粹の民族國家だとはいひ得られないのである。たゞ、今日の狀況の下に於ては、一國家內に於て或る一民族が爾餘の諸民族に比して懸け離れて優勝的勢力を有してゐる場合に於てのみ、さういふ國家が『完全』なる『民族國家』の型に比較的に近づいてゐるものだと見做されて居るのである。

私が玆で尙ほ一言附け加へておきたいことは『民族主義』とか『國民主義』とかいふ言葉に關して一般に受け容れられて居る用語例に關してゞある。一民族が他の民族若しくは諸民族からの國家的支配から解放されようとする要求は

普通『民族主義』――principle of nationality――の名を以て示されて居るが、これに反して、一國家内に於て優勝的地位を占めて居る一民族が、一方に於ては、自國内の弱小諸民族に對して抑壓若しくは同化政策を行ひ、他方に於ては、他の諸民族及び諸國家に對して、樣々の形式に於ける敵對性を發揮することなどに依つて、その獨立民族國家としての生存表現慾を充たすことに努力して居る場合には、さういふ努力の指導原理は、普通『國民主義』――nationalism――と呼ばれて居るのである。かういふことは、他民族の支配の下にある民族が普通・單純に『民族』――nationality――と呼ばれ、既に一國家を形成して居るとか、若しくは一國家内に於て優勝的支配的勢力の中心をなして居るとかの民族が『國家を成して居る民族』といふ意味で『國民』――nation――と呼ばれて居ることとから來てゐるのである。けれどもこの點に於て我々が注意しなけれ

ばならないことは、通俗的用語例に於ては、ネーションといふ原語が、本國に於て屢々極めて放漫に用ひられて居る通りに、その譯語である『國民』といふ言葉もまた、我國に於て極めて不注意に用ひられて居るといふ一事である。殊に我國に於ては、一國家内の統治權の客體である總員を集合的に示すところのStaatsvolk といふドイツ語の譯語として『國民』といふ言葉が用ひられて居る場合が甚だ多いのである。我々が、『民族』とか、『國民』とかといふ言葉を使用する場合には、豫めこれらの諸點を辨別する用意を以てかゝらなければならないのである。

第十章　階級及び民族問題の將來

現代の各國家の對内及び對外政治の上に於て、最も重大なる役目を勤めて居

る諸要素は、今のところ民族關係と階級關係とである。これ等の兩者は、現代世界の政治現象の上に於て、時としては相並行し、時としては相交錯して居るので、それがために政治の局面を非常に複雜なものにして居るのである。それらのうち、政治的要素としての階級關係に關しては、私はこれまでに發表した諸論文に於て、既に度々觸れて來たことであるから（拙著『政治の社會的基礎』序論參照）本書に於ては私は、私がこれまでに比較的に充分に取り扱ふ機會を持たなかつた民族關係を主として解說したのである。けれども、私は私の說明を進めて居る間に於て、民族關係の階級關係に交渉のある方面に就いては、成るべくその要點だけをでも擧げることに努力したつもりである。これ以上の詳論は、私は他日を期してそれを試みるつもりである。（尤も、私は本書に於て、幾分その缺陷を補ふといふ意味で、この點に關するクノーの論述の譯文を卷末

に『補論』として載せることにする。しかしながら、私はこれから、本書に最後の結論を與へるために必要な範圍內に於てのみ、現代の資本國家の下に於ける階級と民族との關係の現在及び將來に就いて、今少しく論述をつゞけて行かうとしてゐるのである。

いふまでもなく現代の各資本國家に於ける支配階級は、槪括的にいへば資本階級である。ところが、現代の各資本國家內に於ける支配階級は、從來の各民族內に於ける支配階級と同樣に、民族意識若しくはその高度に發達した形式である國民主義を、依然として自階級の存續のためにも、またその利益のためにも、樣々に利用しつゞけて居るのである。民族意識が、現代の各大國家に於ては、國民主義の形式に於て、主權の槪念と結びつけられることに依つて、益々多く政治的意味を附け加へられつゝある傾向のあるのは、全くそのためである。

各資本國家内に於ける資本階級は、政治的意味に於て支配階級であると同時に、經濟的意味に於ては搾取階級である。この點に關してもまた、それは過去に於ける各民族内若しくは各國家内の支配階級とその性質を同じくして居るのである。たゞそれは、その性質に於けるその働きの規模を無限に擴大し、またその表現を非常に變化せしめて居る點に於て、幾分の相異を示したゞけのことである。すなはち、現代の各資本國家内に於ける資本階級は、その支配階級としての存續のために、一方に於ては自國内に於ける被支配階級の全體に向つて經濟的搾取を行ふ必要を感じる許りではなく、他方に於ては世界の各部に散布せられて居る他の諸國家及び諸民族に對してもまた、出來るだけその經濟的搾取の手を擴げることに努力して居るものである。

かういふ譯であるから、一方に於ては資本主義そのものゝ發達が、或る意味

に於ける國際的連帶感情を暗々裡に進めることに依つて、少くとも政治的意味に於ける民族意識若しくは國民主義を減退せしむる樣な方向に働きかけて居るにも拘らず、資本階級は今も尙ほ、依然として民族意識若しくは國民主義と絕緣することが出來ない許りではなく、樣々の形式に於て益々それらを高潮せしめようとする傾向をさへ示して居るのである。

現代の資本的帝國主義が國民主義の基礎の上に打ち建てられて居るものであることは、誰れもが知つて居る通りである。それは、政治的意味に於ける民族意識の極度の利用である。しかのみならず、搾取階級としての資本階級と、被搾取階級としての被支配階級とは、經濟的には全然相反した利害關係の上に立つて居るのであるが、彼等は出來るだけこの利害關係の相反性を蔽ひ隱すためにも、益々對外的敵對性に立脚する國民主義を强調する必要を感じるのである。

國内に於ける社會問題の紛糾を緩和するために自國民の注意を對外問題に向けるやうなことが、現代各資本國家の現實政治家等の慣用手段であることは、これまた一般によく知れ渡つて居ることである。

かういふ譯で、政治的意味に於ける民族意識、及びそれに立脚せしめられて居る國民主義は、今尙ほ依然として、世界政治の上に戰爭の脅威を以て臨んで居るのである。疑ひもなく、民族意識はその政治的意味を離れても成り立ち得るものだといふことは事實である。少くとも、人間生活の上に、地方色とか、隣保感情とか、鄕土的精神とかいふものが、その存續の餘地を有して居る限りは、或る意味に於ける民族意識はいつまでも人間生活から搔き消すことが出來ないものである。そして、これ等の感情的諸要素は、恐らく人間生活と共に永遠に存立をつゞけるものであらうから、從つてそれ等に立脚せしめられる一

種の民族意識もまた、永久に人間生活に跟いて行くものであらうと考へられる。かういふ意味に於ける民族意識は、全人類生活に向つて幸福を與へることはあつても、その上に禍亂を釀成せしめるやうな脅威を伴ふものではないのである。

けれども、かういふ意味に於ける民族意識は、今日までのところでは、どこへ行つても、まだ充分に發現せられる機會を持たないでゐる。否、今日までのところでは、どちらを振り向いても、民族意識は、各民族内もしくは各國家内の支配階級に依つて、多分の政治的意味を附け加へられてゐるのである。ところが、民族意識の上に假初めにも政治的意味がつけ加へられて居る間は、それは始終何時となく戰爭を挑發する危險性を必然的に伴つてゐるものであることは、私が前々から反復して述べて來た通りである。殊にそれが、國民主義の形

式にまで發達するやうになれば、それは、世界の上に絶大の禍亂の脅威を永久に掲げて居ると同じ譯合ひになるのである。

現在の國際政治の舞臺の上に於て、フランスの國民主義が最も惡どき軍國主義色彩を發揮してゐることは、我々が現在眼のあたり、ドイツの賠償問題に對して同國が取りつゝある態度を通じて、餘りに露骨に見せつけられてゐるところのものである。世界の平和愛好者らは、今その前に戰慄しつゝある。イギリスの前首相が、その最近發表した論文『民族的自由へ。』昨年十二月中旬に『東京朝日』に飜譯連載せられたものに據る）に於て、この點に關してフランスの政治家たちを彈劾した痛烈な文字は、我々に取つて無限の興味があるものであつた。それは、その筆者であるロイド・ジョージの顯著なる政治的經歷のためであるよりは、寧ろ、彼もまた、フランスの右の態度の遠因を釀成したヴェル

サイユ條約の作成者らの一人であつたといふ事實のためである。で、彼の右の獅子吼は、同時に彼の悔恨の聲だとも聞かれるのである。たゞ彼の所謂『民族的自由』は、どれほどその政治的意味を脫却したものであらうか？　それが、我々に取つて、一つの疑問である。我々は、彼が眞の世界平和の使徒として叫び得るためには、まだまだその思想の上に一進步の餘地があるものと思はしめられるのである。

第十一章　結　論

人類の社會生活を、戰爭の行はれるのを常態とする現在の世界から、戰爭のない未來の永久平和の世界へ移り入らしめる程も、それ程も根本的な變化――若しくは私が上に示した意味に於ける『動的變化』の――起る日が、我々の時

代にでも、若しくは次の時代にでも、兎に角近き若しくは遠き將來に於て、一度は到來するものであらうか？　かういふ問題に對して、一の明確なる答案を與へるやうな冒險を試みるものは、極端なる空想家以外には、恐らく一人もないことであらう。けれども、若しさういふ日が一度は到來しなければならないものだとすると、人類はその前に右の政治的意味に於ける民族意識及びその高度に發達した形式である國民主義を、根本的に世界の外に一掃し盡くす日を持たなければならないのである。

永久平和の理想に憧憬する人々は、暫らくその未來のユートピアを描く煩勞を――若しくは慰樂を――やめて、この現實の問題に面接しなければならない筈ではあるまいか？　少くとも彼等は、かういふ問題が片付く日までは『戰爭を終熄せしめる戰爭』といふやうな標語は、所謂『愚人のパラダイス』に屬す

るものであることを、眞面目に考へなければならないのである。無限の過去から現在の瞬間に到るまで、一の戰爭は他の戰爭の種子を播きつゞけて來たが、しかし戰爭が戰爭を決定的に終熄せしめたやうなことは、未だ曾て一度もあつた例しがないことである。さういふのが、戰爭の性質なのである。少くとも、社會進化の過程の上に、今一度の『動的變化』を惹き起すやうな社會的原因が新たに加はつて來ない限りは、さういふことは恐らく何時までも、戰爭の性質として存續するであらう。といふのは、未だ曾て一度もあつた例しもなかつたことが生ずるためには、それを促すに足るだけの特別の原因が新たに加はらなければならないものであるといふ程のことは、社會進化の性質に關する理解からでなくとも、たゞ單なる一片の常識からでも、何人にも容易に認知し得られることだからである。

しからば、さういふ特殊の社會的原因が何であるかといへば、それは支配階級對被支配階級とか、搾取階級對被搾取階級とかいつたやうな階級的差別が、國家生活から全然取り去られるといふことである。それが、自然的原因からでも、たゞしは人爲的原因からでも、兎も角國家生活から消え去つて行くといふことである。若しさういふことが起らないで、依然として國家生活の上に右の階級的差別が存續する限りは、支配階級が、その階級的存續の保全のためにも政治的意味に於ける民族意識及び國民主義を際限もなく利用しつゞけて行くことは、その免れられない運命なのである。それは、社會生活の上に働く一種の『自然法則の働きの結果だとさへもいへるのである。プロレタリアートのインターナショナリズムが、『國民主義』に對して反抗の態度を示して居るのは、實は右の政治的意味に於ける民族意識及び國民主義に反對して居るのである。

そして、それがそのインターナショナリズムの理想の完全なる實現の前に、階級的差別撤廢の要求を置いて居るのは、論理的には正しいものだといはなければならない。たゞ、この要求が貫徹される日があるであらうか否か？ そして若しそれが貫徹される日があるであらうとすれば、それがどういふ徑路を經てどういふ形式に於て現はれるものであらうか？ といつたやうな問題は、玆で私が解決することが出來ない問題でもあれば、また解決を企てる必要のない問題でもある。

私は玆ではたゞ、資本階級と常に政治的意味に於ける民族意識及び國民主義を强調することを怠らないにも拘らず、それに逆行する傾向のある一種の國際的連繫感情ともいふべきものが、資本主義そのもの丶發達の當然の到着點としてさへも、既に少くともその萠芽を示して居ることをつけ加へて置きさへすれ

ば、それでいゝのである。そして、政治的意味以外の民族意識が必ずしも、この國際的連帶感情と矛盾する必然性を持つて居るものでないといふことは私が既に簡單ながら述べて置いたことである。

民族と階級補論

はしがき

前篇での私の論述の中に言ひ漏らした部分を多少補足するといふ意味で、私は、ハインリッヒ・クノーの近著である『マルクスの歷史・社會・及び國家學說』(Heinrich Cunow, *Die Marxsche Geschits-, Gesellschafts- und Staatstheorie*, Berlin, 1921)の第二卷の第一章の中から次の二節を譯載することにする。それに現はれて居るクノーの考へ方は、私が大體に於て贊同してゐることであるから、私は、それを譯載することに關しては別に、何等の辯解をする必要はないと思ふ。たゞ、その所論が如何にも簡約ではあり、且つまた、前篇に於ける私の論述と、この譯文とを合せても、民族と階級との關係といふ刻下の重要問題に關して充分に言ひ盡されてゐない部分が非常に多く殘つてゐるから、私は更らに機を見て、それに關する詳論を書いて、科學思想普及會から刊行しようと企てゝ居る。

尙ほ、も一つ附け加へて言つておきたいことは、私は大體に於て、原文に Nation とある

のを『國民』と譯し、Nationalität とあるのを『民族』と譯しておいたが、必ずしもさうなつて居ない場合もある。それは、私が前篇で述べた通りに、『國民』といひ、『民族』といふのは、相對的の概念であつて、その形成の過程に於て、或は前者で呼ぶのが適當である場合もあれば、或は後者で呼ぶのが適當である場合もあるからである。それからまた、私は時としては、場合々々の必要に應じて、Nationalität を『民族性』と譯しておいたところもある。それに、National といふ形容詞は、前後の關係に應じて、或は『國民的』と譯しておいたところもあれば、或はまた『民族的』と譯しておいたところもある。『民族』及び『國民』に關する外國文を飜譯する際に、私達が常に一番に惱まされるのは、當該問題に關する術語についてゞある。

譯者

第一章　國民及び民族構成の過程

マルクス及びエンゲルスの書いたものゝ中には、成る程、國民 Nationの進化過程のこともあまり詳しくは述べてゐないし、從つてまた、國民 Nation 及び民族 Nationalität の觀念に對する定義もあまりに與へてはゐない。所謂國民問題及び民族問題については、彼等は折々、彼等の時代に擡頭した民族運動に關する評論に於て、殊にパン・スラヴィズム、及び民族主義に即して行はれたナポレオンの政策に反對する爲めの論爭に於て、自分達の意見を發表した位のものに過ぎなかつた。が、これに反して、オーストリアのマルクス派の新しき理論家の一人であるオト・バウアーは、マルクス及びエンゲルスの考へ方に基いて、國民及び民族に關するマルクス式概念を決めようと試み、同時にドイ

ツ國民の進化の實例を基礎として、國民の發生の過程を究めようと企てた。彼の書物には『民族問題と社會民主々義』といふ標題がつけてある。如何にもバウアーは、ヘーゲル及びマルクスの社會學說及び國家學說をハッキリ摑んでゐないで、寧ろ根本的にはカント及びシュタムラーの社會學說を探つてゐるから從つて、國家を社會の諸形式の一つだと見てゐるのである。けれども、國民といふもの丶歷史的及び政治的性質を述べる段になると、彼は全然マルクス式の考へ方の筋道を追うて進んだのである。それ故に、この問題に關する彼の議論は、徹頭徹尾、マルクスが述べる可くして述べなかつたことを補つてゐるものと見做すことが出來るのである。

國民なり民族なりの構成の基礎として、彼は一種の自然的共同體を見た。詳しく言へば、それは一定の地域內に於ける、血族的若しくは種族的共同團體で

ある。さういふ血族的共同團體の中から、同じ生活條件及び同じ歷史關係の下に、一種の共同歷史及び共同文化を所有する共同體が發生し成長するのであつて、それがつまり民族なり國民なりの基礎となるものだ、と彼は論じてゐる。かういふ譯で、例へばヨーロッパに於けるゲルマン系の人間は、本來は、共同種族及び共同傳統といふ結合力の上に基礎づけられてゐるものである。で、彼等が定住的農業を營むやうな生活狀態に移り入つて、他から隔離された住居區域の上に生活の本據を定め、そしてそこで、次第に特殊の文化生活樣式を築き上げるやうになつてから、このゲルマン系の人間の生活範圍の中に、だんだんと明確になつて行つた種族文化及び種族性が形成されるやうになつたのである。大きな河流とか山脈とかで隔てられないで相互に隣接して住居を構へてゐた多くの種族の諸分派は、同樣の文化的影響をうけ、また、ほゞ同樣の歷史的

運命を共にするやうになつて、それから始終相互間に交通往來したり、婚姻關係を結んだりして居た間に、それ等のものは、次第々々に相互的に同化するやうになつた。かくして同類の共通種族性が發生したのである。

バウアーは前掲の第書物の二十三頁に於て、この關係を、次の言葉で述べてゐる。

『相互間の交通往來が久しく續いてゐた間に、共同の言語が形作られ、相互的婚姻關係が久しく續いてゐた間に、共同の血族關係が促進せられ、共同の地域に居住したり、共同の敵と戰つたり、共同の歷史的運命を經過したりしてゐた間に、同類の種族性が釀成せられ、また相互的交通往來が久しく續いてゐた間に、親族關係につながれてゐるとか、互に隣接して住んでゐるとかしてゐた多くの土民の間に、それ〴〵の樣々の經驗が互に交換され合つたり

して、従つて、益々統一的な種族性が形づくられるやうになつたのである。そこで、一方に於ては、ゲルマン系のすべての人間を結合してゐた紐帶がだんだんとゆるんだけれども、他方に於ては、その間に於ける種族別がだんだんと明確になつて、各種族が同じ血統及び風俗習慣を所有する土民の共同體としての民族となつたのである。かくて、ゲルマン系の人間がアレマン族、フランク族、ザクセン族、バイエルン族、ゴート族及びヴアンダルト族となつたといつたやうに、それぞれに別れ別れになつて行つたのである。』

かういふ進化過程の進んで行つた間に、樣々の社會層が、次々と代るがはる、ドイツ文化の支持者となつたのであるが、併し、これ等の各社會層の間に於ける民族性の意識が、それぞれの間に異つた特徴を發揮したものである。その

後、封建制度の爲めに、舊時のゲルマン土人に特有の軍隊組織が崩壞して、そして多くの封建諸侯及びその家臣等が國土防御の任に當るやうになつてからは武士團が先づ第一に、民族敎化及び民族文化の擁護者となつて、農民は一定の地域の上に縛りつけられ、外界との交通往來を遮斷せられるやうになつた。かういふ狀態の下に於て、農民はたゞ、近隣の農民同志と知り合ひになつてゐただけであつて、從つて、これ等の農民はだゞ、農民同志で相互間に雜居したり交通往來したりするだけであつた。そこで、殆んど個々の小地域の上に、純農民種族といふ特殊型が發生したといつたやうな次第となつた。從つて、それにつれて個々の限られたる地域の上に、それ〳〵に異つた特殊の土民的風俗習慣なり特殊の土語なりが形成せられて、多少の程度に於て、それ〴〵に地方的特色を發揮したのである。

他方に於ては、武士團が國土防禦の軍隊を構成してゐて、そして國君がその臣下を行軍の爲めに召集するや否や、彼等はそれに應じて、國内の諸地方から出て來て、一所に會合したものである。それと同樣に、舊時代に於ては閱兵式の擧行された度每に、また後には全國會議が召集された度每に、武士團の大部分が、互に集合接近する機會を持つやうになつたものである。また、大諸侯たちがそれ〴〵に、その領土の上に於て會議を召集した場合にも、大領土内の武士達が、或る期間、それ等の諸侯の居城に集合したが、それは主として、敎會の大祝祭等といつたやうな時に行はれたものであつた。その上に尙ほ、かういふ武士仲間では、城市と城市との間の、また隣邑と隣邑との間の交際が頻繁に行はれたものであつた。

かういふ順序で、全國内の武士仲間に於ける特殊の精神文化が、次第々々に

形成されて行つた。最初には、詩歌や美術は主としてたゞ僧庵とか寺院とかで保護されてゐたものであつたが、その後間もなく、武士的歌謠が次第に勢力を得るやうな傾向になつた。かくて、武士の歌ひ手たちは城市から城市へ、宮殿から宮殿へと渡り歩いた。武士的の英雄讃美の歌謠や、宮殿情調の歌謠も發生するやうになつて、そしてかういふ交際が行はれた間に、一種の共同言語がその間に發生するやうにもなつた。尤もドイツ國内の武士團の間には、すべての城市に於て話されたり了解されたりするやうな、全然共同の國語といひ得られる程度の御殿言葉は、とう〳〵形成せられるといふ段には達しなかつたが、しかしながら、各城市間に親密な交際が行はれた結果として、國内各地の武士たちは相互間にだん〴〵と接近するやうにはなつたのであつた。しかも、かういふことは、所在の農民の土語の間に於ける相異がます〳〵顯著になつて行つた間

に行はれたのである。それから更らに、武士間の交際のうちから、一種の統一せられたるドイツ的の武士風が育成せられたのであつた。尤もこのドイツ的の武士風は、殊に十字軍時代に於て、フランスの武士風に感化せられたやうなこともあつたが、しかしそれにも拘らず、それは間もなく、特殊の民族風を帶びるやうになつたものである。かういふ武士風の生活樣式が形づくられたことの結果として、他國の風俗に對する自國風の相異の意識が呼び醒まされもすれば自國のドイツ式武士風に對する所屬の意識が明確になりもした。かくして促進せられた武士的風俗に立脚した民族意識の形成の次第は、既にかのヴアルタアの作つた有名なる歌の上にも現れてゐるのである。――

私は多くの國々を屢々見た。
到る處で最もよきものの方に眼を投げた。

けれども若し私が私の心に
異國振りが氣に入つたと言はせるやうなことがあるならば
私の身の上に禍あれ。
私が僞りを言はうとしても、それが何んで私の爲めにならう?

ドイツ風がすべてのものよりも優れてゐる。

この所謂民族文化といふものは、如何にも純粹の階級文化であつて、農民はそれに少しも參加してゐなかつたのである。

オト・バウアーは前掲書の第五十一頁で、なほ續いて次のやうに言つてゐる。『永い間、宮殿風と村落風との間には截然とした區別があつた。農民は武士風の生活には何等參與する所もなくて、寧ろ支配階級は農民の眼には、我雜な無智なものとして映じ、彼等の嘲笑の對象となつた。と同時に、宮廷詩人たち

は農民を侮蔑して、『田舍ッペー』といふやうに呼んで、武士が村の美人の跡を跟けるのを彼等が不興がる所などを詠んで慰んだりした。かういふ風に、武士文化と農民文化との間には、橋渡しの出來ないやうな溝渠が橫はつてゐたのであつた。そして、國民といふ名のつくものには、農民は何の關係もなかつた。御殿言葉は武士たちを結びつけたが、農民の土語からは段々と隔つて行つた。宮殿の生活振りは、ドイツの武士たちを結合する紐帶のやうに彼等を取り卷いたが、田舍の農民の生活振りは、地方々々によつてそれぞれに異つてゐた。武士團は全國に亘つて統一的の封建的法制を作り上げるやうになつたが、農民に適用せられる諸侯の法制は、地方々々に依つてまちまちになつてゐた。かういふ譯で、ドイツの農民は當時にあつては國民を構成する要素とはなつてゐなかつたのであつて、寧ろ、國民生活の蔭に潛む下積みとなつてゐたのであつた。

國民はたゞ共同文化に即してのみ成り立つてゐたのであるが、しかしながらそれは、たゞ支配階級の上にのみ限られてゐたのであつて、この支配階級に衣食を給してゐた大多數の民衆は、それからは遮斷されてゐたのであつた。

ドイツの諸都市の勃興及び市場向き商品の生産（自己の使用に供する爲めの貨物の生産でなくて、販賣に供する爲の貨物の生産）の發達と共に、また專制的國王の權力の勃興と共に、また、封建制度の沒落及び雇兵の軍隊が武士の軍隊に取つて代つたやうな狀態の發生と共に、右に述べたやうな狀況は次第々々に變つて行つた。まづ最初に、當時に於て發達し成長し始めた諸都市の市民階級は、一定の程度の知識の必要を感じない譯には行かなくなつた。そこで、多くの高等の都市學校が設立せられるやうになり、その學生等は單に讀み書きの術を敎へられたばかりでなく、ラテイン語をも學習するやうになつた。一方に

於ては、印刷術の發達が市民的文藝の急速なる發達を促したと同時に、他方に於てはまた、上層の市民階級の富の增大が、美術的手工業の發生の途を開いた。詩歌の技すらも、崩壞し行く城市の武士たちの手から離れて、手工業者仲間の詠ひ手の手に移つた。しかも、これ等の市民は、ラテイン語のわからない一般民衆とも取引をする必要に迫られもすれば、印刷物を、殊に宗教上の印刷物を、出來るだけ廣く讀ましめなければならない必要を感じもしたのであつたが、かういふ事實の結果として、一種の統一的の文語が使用せらるゝに至つたやうな形勢が生じて、文藝復興の風潮が、ドイツにも押し寄せて來たのである。

かうなつて來ると、國民文化及び所謂國民思想の支持者は、最早や武士階級ではなくて、主として新興の富裕な、敎養のある諸都市の市民階級となつたのである。無論それは市民階級の全體ではなかつた。といふのは、小市民階級は

それには少しも參加しなかつたからである。かういふ譯であつたから。農民や賃銀勞働者等は、尙ほ更らそれには無關係であつた。で、當時の市民階級中心の國民文化共同體は、取り分け、學者團、官吏團、及び自由職業團、並びに富裕なる（就中、商業を營んでゐた所の）市民團を包含してゐたのであつた。

近代的資本主義の發達に連れて、鐵道業及び海運業を通じて、交通が非常に大規模な狀態に昇つて行き、農業上の經營も大規模商品生產の埒內に引張り込まれ、また、勞働者は祖先傳來の鄕土から引離され、それと共に學校制度の改善、及び勞働者團の政治的及び精神的生活への參加が、益々手廣く行はれるやうになつたのであるが、かういふ形勢の增進するに連れて、國民的共同文化團體の範圍が益々擴大せらるゝやうになつた。それは、資本經濟から來る樣々の障害があるにも拘らず、次第に益々擴大せられるやうになつたのである。そし

て勞働者團にも、小市民階級にも一樣に、益々多く此の國民的共同文化團體に仲間入りする道が開かれるやうになつて來たのである。

かういふ事情に基いて、オト・バウアーは、國民を定義づけて、共同の歷史的運命の中から成長した性格的共同體(Charaktergemeinschaft)だとしてゐる。で、つまり國民性といふものは、或る一定の歷史的進化が殘して行つた沈澱物だ、といふことになるのである。即ちバウアーが、前掲の書物の第百三十八頁で述べて居る通りに、國民といふものは、『國民性の外形に於て、若しくは、その所屬各個人の帶びてゐる所の民族性の外形に於て發現するものに他ならない』のである。そしてまた、各個人の帶びてゐる所の民族性といふものは『社會の歷史によつて決定せられた彼の性格の一面に他ならない』のである。

歷史的運命は、一方に於ては、上に述べたやうな性格的共同體を漸次に鍛え

上げると同時に、それは他方に於ては、國民的同屬感情、若しくは單に國民的感情といふものを形成するものであるが、この國民感情の進化の途上に於けるその中心的支持者は、前に述べた通りに樣々の異つた社會層若しくは階級が、次々とそれに成ることがあるのである。先づ第一に、この國民的感情といふものは、ある特定の民族的集團に屬してゐるといふ事實、及び他の（民族的）集團に屬してゐないといふ事實の、單純なる認識に外ならないものであるが、この認識は、各個人が、大抵はまだ、ハッキリとそれと感知してゐないといつたやうな種類の認識であるから、從つて、それはこの程度に於ては、やつと發生し始めた『本能的國民感情』だ、といひ得られる種類のものである。國民の範圍の擴大するにつれて、また其內部の結束の强まるにつれて、——換言すれば、他國民と異つた特殊の國民型が形づくられて、そして、その他と異つた特徵が

だん〱明確に發揮せられるやうになるにつれて――この本能的國民感情といふものは次第に擴大して、同類同屬の意識に變つて行くものである。そしてこの同類同屬意識は、しまひには、その國民の內部に於ける個々の要素の地方的特徵といふものを壓倒して（無論それ〴〵異つた程度に於てゞあるが）、その國民の構成員のすべてを國民として包容するやうになり、そしてそれを通して、本式の國民意識、若しくは一種獨特の國民的感情となるのである。かうなつて來ると、國民意識に眼醒めたものは、その民族的特質を自分自身の性類の一部として、自分自身の屬するタイプの一部として認識するやうになり、そして彼の眼には、彼自身の類性が極めて自然なものでもあれば、それ自身に存在の根據を持つてゐるものでもあり、且つまた價値あるものでもあるやうに見える所からして、彼れは自分の屬してゐる國民の民族性のうちに、維持保存して行かなけれ

ばならない程の價値のあるものを認めるやうになるのである。それ故に、彼にとつては、自分の民族的特質に順應する一切のものは、存在の價値があれば良きものでもある。これに反して、それに逆行する一切のものは、價値の少いものである。――といつたやうな譯になるのである。

第二章　國民的感情と階級差別

上例に示した通りに（クノーの例は略する。但し本書第六――七章參照）、民族的、國家的、經濟的、宗教的の諸動機は、相互間に屢々深い關係を持つて居るものでもあり、また縱横に相交錯して働くものでもある。殊に民族と種族、階級及び國家との間には、特別に密接な相互的關係が存してゐるものである。一國民が、同時に、隣接諸國民とは明かに相異した種族團體を構成して居る場合

には、無論、その國民の總員の同屬感情及び他の諸民族に對する異屬感情が强められる。が、これに反して、一國民の進化の過程に於て、自國民内の異種族が、國民籍に編入せられながら、未だ充分に同化されるまでに至つてゐない場合には、總員間の同屬感情は弱められるのである。

職業的共同團體も亦、同樣の影響を國民感情の上に及ぼすものである。カウツキーの言ふところに從へば、『ドイツの農夫とデンマークの農夫とは、異國民籍に屬してゐながら、彼等の文化關係は或る程度に於て互に似通つてゐるが、これに反して、シユレスヴヰヒ州の農夫と、ベルリン市の西區に住む新聞記者若しくは藝術家とは、同國民籍に屬してゐながらも、却つて相互間の文化關係が疏遠である。』カウツキーが、この例によつて、職業團體と國民感情との間の關係を示して居るのは正しい。けれども、彼はそれから推論して、『職業が同じ

であるといふことが、同じ人生觀、同じ感情、及び同じ利害關係を發生せしめるが故に、國民といふものは性格的共同團體なのではなくて、寧ろ一種の共同言語團體に過ぎないのだ』と、結論してゐるが、これは間違つてゐる。たゞ、カウツキーの所論から導き出されることは、次の一點に過ぎないのである。即ち、國民といふ共同團體以外になほ他の幾種類もの共同團體が存在するものでもあり、また、國民的同屬感情以外になほ他の幾種類もの同屬感情が存在するものでもあつて、しかも時と場合によつては、後者の方が前者の方を壓倒する程に優勢であることとすらある、——といふこの一點である。

同樣のことが、階級的共同團體及び階級的感情、殊に階級意識に關しても亦言へるのである。一國民內に於ける階級的差別が甚だしく行はれてゐて、從つて、階級的反感が強く現れてゐる場合に於ては、無論、諸國民間に於ける衝突

軋轢に際し、一國民內の何れかの階級は、寧ろその國民と爭つてゐる他の國民內の同じ階級に對して連帶感情を起して、却つて自國民に對して反抗の氣勢を擧げるものである。そして、さういふ階級が抑壓された階級であつて、その國民生活にあまり參與してゐない場合に於ては、殊にさうである。それは如何にもさうではあるが、しかしそれがといつて、さういふことはたゞ、單純に階級意識の結果だとして了ふ譯には行かないのであつて、寧ろそれは、國民的結合の紐帶の强弱とか、階級的反感の程度とか、一國民內に於ける階級鬪爭の烈しさとか、自國民內及び他國民內の階級構成の類似の程度とか、それから生ずる特殊な階級的利害關係の深淺とかによるものである。かういふこともある代りにはまた、階級意識の爲めに國民意識が非常に强められることもあるのである。それは殊に、一國民が他國民によつて强硬に壓迫され、その發展を妨げられ、

且つ賤民として待遇されて居る場合に起るのである。換言すれば、それは、一の被抑壓國民の抑壓國民に對する地位が、一の被抑壓階級の支配階級に對する地位に、或る程度に似通つてゐる場合に生ずるのである。アイルランドがイギリスに對して、丁度かういふ階級構成の關係に立つてゐる。が、しかし、單にアイルランドばかりではなく、マルクス及びエンゲルスの解釋に從へば、以前は、ヨーロッパ大陸の諸國がイギリスに對しては、プロレタリアートの商工業上のブルジョアジーに對する關係と、或る程度に於て似通つた關係に立つてゐたものである。例へば、すべての點から見てマルクスが書いたものと思はれる『フランス及びイギリスに於ける階級鬪爭』といふ一論文（一九八四年六月二十八日及び七月三十一日の『ノイエ・ライニッシェ・ツアイトゥング』紙所載）に、次の通り述べられてある。——

『すべての獨占業の撤廢によつて、競爭が自由になればなる程、それだけ急速に資本が大工業家連の手中に集中せられ、それだけ急速に小ブルジョアジーが崩壞に導かれ、またそれだけ急速に、資本獨占國であるイギリスが、その周圍の諸國を自國の工業の支配下に抑壓する。で、フランス、ドイツ、及びイタリーのブルジョアジイの獨占業は、それが爲めに打ち破られ、そして、ドイツ、フランス、及びイタリーは、すべてを併呑するところのイギリスのブルジョアジーに對して、さながらプロレタリアートの地位に陷し入れられる。そこで結局一人々々のイギリスのブルジョアが、一人々々のイギリスのプロレタリアーに對して行つてゐる抑壓と同樣の抑壓を、イギリスのブルジョアジー全體が、ドイツ、フランス、及びイタリーに對して行ふとになり、そして特にさういふ事情の下に苦しむ者は、これ等の諸國の小ブルジョアジ

ーだといふことになるのである』

エンゲルスは同紙の一八四九年の新年號の論文で次のやうなことを書いてゐる。——

『諸國民の全部を自國のプロレタリアートに變成し果せた國、——其巨大なる腕の中に全世界を抱き込んだ國、——その黄金を以て既に一度ヨーロッパの再興運動に挑戰した國、——そしてその國内に於て階級鬪爭が最も特色のある、最も無恥な形式をとつた國、——その國即ちイギリスは、巖のやうに屹立してゐて、革命の波がそれに打つ突かつては摧ける。例へて言はゞこの國は、新社會を既にその母の胎内で飢え死にさせる。イギリスは世界市場を支配する。ヨーロッパ大陸の各國に於ける國民經濟的諸關係の革命は、イギリスを拔きにした全ヨーロッパ大陸の上では、一盃のコップの水の上で

の嵐のやうなものである。』
イギリス國民が、他のヨーロッパ諸國民に對して取つてゐたところの、かうした特殊利益の伴つた地位から出發して、エンゲルスはまた、何故にイギリスの勞働階級が、一八四五年から一八八五年に至るまでの期間に於て、社會主義に無頓着でゐて、且つヨーロッパ大陸諸國の勞働階級の階級意識に對して否認的態度に出てゐたかを説明した。即ち、イギリス國民が諸階級に分裂してゐたことは事實であるが、併しながら、イギリスの勞働階級の最大部分は、なほイギリスの工業並にその商業の獨占的地位から、ある種の利益を得てゐたのであつた。彼等は『國民的』の資本利得に參加することを得たので、從つて彼等の階級的地位は、ヨーロッパ大陸諸國民の勞働階級のそれとは同じではなかつたのであつた。そして、彼等のかういふ特殊地位の爲めに、資本主義に對してドイ

ツやフランスの勞働階級と同樣の態度を採り得なかつたのであつた。で、エンゲルスは、ロンドンの『コムモンウエルス』誌に寄せた論文に次のやうに述べた。――

『イギリスの工業上の獨占的地位が繼續した間は、イギリスの勞働階級は或る程度までは、この獨占的地位に伴ふ利益に參加することを得たのである。もとより、この利益は、彼等の間には極めて不平等に分配された。即ち特權的地位にある少數者が、その最大部分を壟斷したのであつた。が併し、大多數者も亦、時々には、一時的にでもその分け前に均霑したものである。そして斯ういふことが、ロバート・オーウェン派の社會主義が死滅した後に、イギリスに再び社會主義が起らなかつたといふ事實の原因となつたのである。ところが、右の獨占的地位の崩壞と共に、イギリスの勞働階級は、その特

殊利益の伴つた地位を喪失するであらう。即ち彼等は、おしなべて、——特權的地位にある指導的少數者も、その例外とならずに、——早晩は、諸外國の勞働者等と水平の地位におかれてあることを發見するであらう。そしてそれがまた、イギリスに再び社會主義が起るであらうといふことが豫言し得られることの根據である。』

この點に關聯して、エンゲルスは、それ故に勞働階級が自國民間のブルジョアジー及び他國の勞働階級に對する態度は、或る程度までは、彼等が如何ほど國民的利益に參加して居るかといふ點に繋つて居るものである、といふことを述べてゐる。

世界大戰前の時代に行はれてゐた、ドイツの社會民主黨の文献に現れた意見は、大抵はそれと相異してゐた。即ちかういふ文献では、大體次のやうなことが

主張されてゐた。――ブルジョア階級の國民的感情は、勞働者等の階級意識に殆んど何等の影響を與へることは出來ない。ドイツの勞働者等は、階級意識に風靡されてゐるから、彼等は、すべての國民的限界を超脱して、寧ろ、イギリスやフランスやイタリーやの勞働者等を、自分たちの同胞だと考へてゐるのであつて、從つて、將來の戰爭の勃發の際には、却つて、これ等の諸外國に於ける彼等の階級仲間に加擔するやうに導かれるであらう。と、大體かういつた調子であつた。殊にカウツキーの如きは、さういふ主張を基調として意見を述てゐたものである。で、彼は、例へばオウストリア・ハンガリーに於ける民族鬪爭に關して、次のやうに言つた。――

『社會民主黨員であるプロレタリアーは、この民族鬪爭には動かされない。彼等は、現在の社會の下に於て生き甲斐のある生存を得られようといふ希望を、

即ちブルジョアになれようといふ希望を、拋棄してゐる。それが、彼等が社會民主黨員である所以である。それ故に、彼等にとつては、何れの國民が、若しくは何れの人種が、若しくは何れの宗派が、ブルジョアの種を産出しようが、一向無頓着なのである。』

社會主義が國民主義、國際主義、及び愛國主義に對して、如何なる態度をとつてゐるか、そしてまた、社會主義者等は民族問題に關するその解釋から、戰爭の場合に如何なる義務を感じるかといふ質問を、フランスのラ・ヴヰー・ソシアリスト誌から向けられた時に、カウツキーはそれに應じて、可なり長い論文を書いたが、その中で彼は、諸大國民のプロレタリアー階級は自然的の聯合を形づくつてゐるものであるといふ趣旨を主張した。そのうちの一句を次に引用する。――

『國民的軋轢は、プロレタリアー仲間に於ては、何等の地位を占めるやうなとはない。それは、プロレタリアートが精神的及び政治的に制肘を受けない場合には、起つて來ないものである。プロレタリアートがそれ程の地位に進んで來て居る場合には、彼等は決して侵略的愛國主義を發展せしめないであらう。彼等は決して他國を犧牲にして自國の利益を進めるといふやうなことをしないであらう。』

それ故に勞働階級の反國民主義は、世界戰爭を妨げる爲めの最も屈強なる障壁だと、カウツキーは揚言してゐる。如何にも勞働階級は、今のところではまだ、戰爭を全然不可能ならしめる程の力を得てはゐないが、併し、彼等の抗議が、從來に於ても、既に幾度となく諸國民間の衝突を妨げた。といふのが彼の主張である。(引用句省略)

かうした幻想は、今次の世界大戰の勃發以前に於て、旣に激甚に赴いてゐた民族鬪爭の前に、無意味なものとなつてゐた。即ち、民族鬪爭は、此の通りに主張せられたやうな、勞働階級の反國民主義に依つて冷却せしめられたやうな模樣は少しもなくて、寧ろそれとは反對に、民族鬪爭そのものが、却つて勞働階級を浚つて行つた趣があつた。殊に、さういふことが、アイルランドに於て最も顯著に現はれた。即ちそこでは、新生の勞働組合的社會主義的勞働運動が、.シン。フヱイン黨の民族運動に投じたのである。それからまだ、オウストリア。ハンガリーに於ても、同樣の現象が生じた。即ちそこでは、社會黨内に於けるドイツ人の分子と、チヱック人の分子との上にまで民族的軋轢の影響が波及したので、遂に一九一一年に於て、チヱック人の社會黨は擧つてオウストリアの社會黨員から分離して、チヱックの民族運動に參加したのであつた。そ

れに續いて、大戰中に於ては、オウストリア人の社會黨員とポーランド人の社會黨員との間にも分裂が生じたのであつた。

オウストリア◎ハンガリーの社會主義の勞働者等が、自國内に於ける民族鬪爭によつて全然動かされないといふ主張は、實際經驗によつて破綻した。が、戰爭勃發の際は、諸交戰國の勞働階級が相互的に連帶感情を抱いて、ブルジョアジーの國民主義に對して、挑戰するであらうといふ豫言もまた、一九一四年に於て同樣の運命に遭つた。一九一四年の八月の始めに、列强の宣戰布告が發せられた時に際して、國民意識が崩壞したどころか、寧ろ社會主義的勞働インターナショナルと、國際的連帶感情とが崩壞したやうな始末であつた。

單に、勞働者等の側に於てばかりではなく、市民階級の側に於てもまた、國民的感情が多くの點に於て驚く可き强さを見せた。一方に於ては他國の國籍に

編入せらせてゐるドイツ國民の一部分――例へばスウヰスに於けるそれ――が屢々イギリス及びフランスに對して同情を示して、却つて同じ民族に屬するドイツに敵意を示すやうなこともあるにはあつたが、他方に於てはまた、多年間イギリス及びアメリカに住んで、これ等の國々の言語及び生活樣式に慣らされた上に、また時としてはそこで相當の社會的地位を得てゐたやうな多くのドイツ人が、何の躊躇もなく本國民の側に加擔して、時としては、進んでドイツで軍務に服して實戰に參加したといつたやうなこともあつた。かういふ所から見ても、國民意識といふものは、多くの理論家が、書齋で思念したものよりは複雜なものであるといふことが、明瞭にわかつたのである。

如何にも、かうしたすべての事情によつても啓發され得なかつた社會主義の理論家たちが多くあつたことは事實である。で、彼等は依然として、以前の論

鋒をそのまゝ用ゐ續けたのであるが、たゞ彼等は、流石に今となつては、次のやうな主張をつけ加へた所だけが、以前と相異してゐるのである。——即ち、社會主義的勞働階級は、まだ、彼等の國民的感情を篩ひ落すまでに、そして國際的階級連帶性を充分に摑み得るまでに成熟してゐないのであるが、併し、縦し現在に於ては彼等はまだそれ程成熟してゐないにしても、早晩はさうなるであらう。——と、かういふのである。そして彼等は、彼等が戰前にしてゐたと同樣に、彼等のこの推論を正當に見せる爲めに、マルクスを引合ひに出した。

だがマルクスは（エンゲルスもさうだが）、實の所、決してそんなことは言はなかつた。即ちマルクスやエンゲルスやは、階級意識が國民意識を排除するとか、階級意識を持つた社會主義的勞働者が、毫も國民的感情を持ちもしなければ、自國内の民族鬪爭によつて全然動かされもしないであらう、といつたやう

なことは決して主張しなかつたのである。

マルクスは、たしかに國民主義者でもなければ、ドイツの愛國者でもなかつた。が併し、彼は右のやうな意見を述べるには、あまりに實際社會を知り過ぎた社會理論家であつた。彼にとつては、國民といふものは、國家や階級やと同じく歴史的進化の産物であつた。それ故に、彼の立場から見れば、國民といふものは永遠に同じものではなくて、それは寧ろ可變的なものであつて、從つてまた、將來も變り續けて行く筈のものであつた。如何にもマルクスは、かういふ進化の結果として、國際的軋轢がだん〳〵とれて行くであらうことを信じもしたし、從つてまた、諸國民性がます〳〵均一化するであらうことも信じてゐた。けれども、マルクスによれば、今日の國民的軋轢が、かういふ風に消失するのは、歴史の過程に於て、全く漸進的に完成さる可き筈のものであつて、

そして、マルクスは實に、この進化の順序を次のやうに考へたのである。――商業が世界市場の上に擴がつて行けば擴がつて行く程、そして、諸國民の構成員の間に於ける社交上及び經濟上の諸關係が發達すればする程、更にまた、各國が工業的に進歩した爲めに、或る特定の國家の資本上及び工業上の獨占が停止し、且つ生活上の諸關係が均等になればなる程、それだけづつ相互的に交通してゐる諸國民間に於ける國民的特殊相とか、國民的軋轢とかいつたやうなものが、だん〳〵と消滅するやうになるであらう。殊に勞働階級の手による國家權力の征服は、個々の國家內に於てさういふ機運を促進することの上に、大に力を添へるであらう。といふのは、一の階級が他の階級を抑壓したり搾取したりすることの止まると共に、一の國民が他の國民を抑壓するやうなことが止まるであらうからである。さうなると、個々の諸國家及び諸國民間の、同樣の

文化的目的を實現する爲めの努力が益々優勢に行はれるやうになる。從つて、同じ文化的傾向にある諸國家が、共同の文化的目的の爲めに提携するやうになり、そして遂には、諸國民間の國際的聯合の前に、個々の國民が、國民としての意義を次第〳〵に喪失するやうになるであらう。

マルクス及びエンゲルスは、既に共產黨宣言に於て、この進化の過程を右に述べた通りに描いた。即ち、彼等はその第二部に於てかういつてゐる。――『諸國民の民族的分立及び民族的軋轢は、既にブルジョアジーの發達につれて、商業的自由につれて、世界的市場につれて、また工業上の生產方法及びそれに相應する生活上の諸關係の均一化につれて、次第々々に消失する傾向を示してゐる。プロレタリアートが支配するやうになれば、さういふものは、更らに一層速に消失するであらう。諸國の――少くとも文明諸國の

共同行爲は、プロレタリアートの解放の爲めの最も緊要なる條件の一つである。一人の個人が他の個人によつて搾取せられるやうなことが止まると同じ程度に、一の國民が他の國民によつて搾取されるやうなことが止まるであらう。一國民間に於ける階級間の軋轢が止まると同じ程度に、諸國民間の敵對關係も亦止まるであらう。』

何人も、國民的差別がだん〳〵と消失しつゝあるといふ意見に贊成しようとしまいと勝手であるが、かといつて、社會主義的勞働者が民族鬪爭によつて毫も動かされないものだといふ意見を、マルクスが抱いてゐたと論斷するのは間違ひである。それから又、『諸國のプロレタリアーよ、團結しろ！』（彼等の解放を實現する爲めに）といふ激勵の言葉からも、マルクスが、勞働者をして、民族的共同團體の外に立たしめようと欲してゐたものだと推論することは出來

ないのである。それは丁度、『新聞記者等よ、醫師等よ、言語學者等よ、何々等よ、君等の職務の遂行の爲めに、國際的團體に加入せよ！』といふやうな言葉が、『この職業團體に屬してゐる人々は、自分たちの民族に屬してゐるといふ感情を起してはならない』といふことを、毛頭意味しないのと同じ筋合である。

また、事實上から言つてもかういふことがある。勞働者のインターナショルの結合が成つた後に、それに屬するフランス人等が、『勞働者等は國民に離反すべきものである』といふ要求を提出した際に、マルクスはさういふ企てを一笑に附して、その會合の席上に於ては、彼等に向つて反對の態度に出た。その會合の或る場合の出來事に關して、彼はフリードリッヒ・エングルスに宛てた一八六六年六月二十日附の手紙の中に、次の通りに書いた。——

『若きフランス』の代表委員たち（自身では勞働者でないところの）は、

しすべての民族とか國民とかいつたものは時代後れの偏見だ、などゝ言ひ出した。プルドン化されたスティルナー主義だ。……私が「ラファルグ君は自分の民族籍を抛棄したといつてゐますが、この會衆の十分の九の人たちが聞いてもわからないフランス語で、われ〳〵に演説してくれました」といつて、私の演説を始めた時に、イギリス人たちは噴き出して了つた。私はなほ續いてラファルグは民族を否定しながら、全く無意識の裡に、フランスの優秀なる國民性に彼等が陶醉してゐることを理解してゐるやうに見えることを示唆した。』

併しながら、マルクスは共產黨宣言の中に『勞働者は祖國を持たない』と言つてはゐないか？　たしかに共產黨宣言にはさう書いてある。が、たとへこの文句は、やはり同じ共產黨宣言中にある次の文句と併せ讀む時には、普通屢々そ

れから解釋せられてゐる意味とは異つた意味にとられるのである。

『プロレタリアートは、先づ第一に、政治的支配權を掌握し、國民中の主要階級に登り、自ら國民そのものを構成しなければならないものであるから、その意味に於て、プロレタリアートは國民的である。尤も、それは決して、ブルジョアジーの「國民的」といふ意味に於てゞはないが。』

勞働者階級が、國民中の主要階級の地位に登るといふことは、そして自ら國民を構成する云々といふことは、一體どういふ意味であらうか？　マルクスの國民といふものに對する解釋及び彼のヘーゲル主義を理解してゐるものにとつては、それがどういふことを意味してゐるものであるかは、直ちに明白にわかる。マルクスはかういふことを意味してゐたのである。『今日（一八四八年）では、勞働者は祖國を持たない。といふのは、彼は國民の生活にはこれといふ程

參加してゐないで、國民の物質的及び精神的の所有物から尙ほ全然除外されてゐるからである。併しながら、勞働階級は早晩政治的權力を握り、國家及び國民內に於て支配的地位を占めるであらうが、その時こそは、彼等は或る程度に於て自ら國民を構成するであらうし、從つて、自ら國民的にもなれば、また、國民的にも感じるであらう。尤も、彼等の國民主義はブルジョアジーのそれとは全然別種のものには異ひないが。』

若し、かういふ解釋が正しいとすれば、右の警語から推して、民族問題は勞働者に何等の關係がないといふ意見をマルクスが抱いてゐたと言ふ譯には行かないのである。それは寧ろ、手短かに言へば『今は勞働者は祖國を持たない。といふのは、彼は今のところまで、國民生活には、これといふ程參加してゐないからである。が、彼は後には、それに參加するであらうし、また單にそれば

かりでなく、彼は自ら國民的進化の柱石とすらなるであらう。さうなれば彼は祖國を持つことになるのである。何となれば、國民に對する彼の地位からして、彼自身が國民中に於て取る可き地位が、自ら判明するやうになる筈だからである』といふことになるのである。

從來、ドイツの社會民主黨中に於て、廣く行はれて來た意見は、大體かうである。『勞働階級は、民族、殊に民族的特質には何等の利害を感じないから、從つて彼等の民族感情——若し、彼等がさういふものを少しでも持つてゐると言ひ得られるものとすれば——は、決して彼等の階級的感情に對して優勢を占めるといふことはない』と、大體かういふ調子である。けれどもかういふ意見は、右に述べた理由によつて、民族思想の進化に關するマルクス式解釋とは全然反對に出てゐるのである。

併し、かういふ意見が戰前に於て如何に廣く行はれてゐたかは、オト・バウアーの論述からでも、證明することが出來る。彼は前章に掲げた著書に於て、反對の傾向には一瞥をも與へないで、端的にかう言つてゐる。――

『階級鬪爭の必然が、諸國民を分裂せしめる。勞働階級と所有階級との經濟的利害關係は、各國民の內部に於て、相互的に反撥し合つてゐる。これに反して、各國民內の勞働者の利害關係は、すべての他の諸國民の內勞働者の利害關係と一致してゐる。』

彼は、從前に於て、勞働階級が所謂民族問題に對して比較的冷淡であつたといふ點から出發して、『若し、將來勞働階級が、自ら國民を構成する日が到來すれば、彼等の國民意識が强烈になるであらう、』とは推論しないで、却つて、『若し、彼等が現在に於て、國民意識を持つてゐないとすれば、彼等は將來に於て

もまた、それを持つやうなことはないであらう』と推論してゐる。（引用句省略）

世界大戰及びその結果として、殆んどすべての國々に於て――それ等の國々の勞働階級の間に於てもまた――勃興した國民的運動は、かういふ主張が事實に反してゐることを、根本的に證明したから、從つてこゝで、それに對する駁論を試みる必要がないやうに考へられる。

附錄　社會科學に對する興味の擡頭

一

私たちのやうに、社會科學の一分野の開拓のために勞作しつゝあるものに取つては、社會科學の全般に對する興味が、最近に及んで、縱し徐々にでもせよ、兎も角段々と讀書社會の一角から動き始めて居る徵候を示してゐるのを見ることは、多少の滿足を以て迎へなければならない一事實なのである。

が、『さういふ徵候は、一體どういふところに認められるのか？』といふやうな問ひを向けられると、我々は今のところ、結局、我々がさう感じるといふこと以外に、幾分でも相手を滿足させるほどの明確な答へを提出することが出來

ない狀況に在ることは事實である、けれども、我々が『さう感じる』のは、何等の根據もなしに、唯譯もなくさういふ空想を逞しくしてゐるといつた譯のものではない。それは、我々が最近に於ける新聞雜誌に現はれる諸論文に取り扱はれてゐる題材を見ても、または最近の出版界の傾向の一面を見ても、我々をしてさういふ徵候の現はれを感ぜしめる材料が、決して缺乏してゐるとはいへないからである。殊に社會學若しくは、社會科學の著書若しくは譯書が、或ひは單行本の形ちで、或ひは叢書の形ちで、續々刊行せられる形勢が、段々と濃厚になりつゝあることは、多少とも讀書社會の現狀に注意してゐるものゝ見逃すことが出來ない一傾向である。

無論、かういふ傾向は、出版界の上に絕えず去來し循環して現はれてゐる流行の鎖の一鏈であるかも知れない。それは恰度、曾つて勞働問題若しくは社

會問題と銘を打つた讀み物とか、哲學的若しくは宗教的若しくは自然科學的方面の讀み物とかが、順繰りに交替しながら、忽ちに現はれ、忽ちに影を潜めたやうな過程を再現しようとしてゐるものであるかも知れない。否、實のところそれは、まださういふ意味の流行といふ程度にまですら達してゐないのであつて、寧ろたゞ、多くの出版業者等が、それを當て込んで、投機的に、その方面の出版に着手し始めたところから、さういふ形勢が幾分づゝ動き始めたやうに見えて居るのに過ぎないものであるかも知れないのである。然かも、さういふ投機的出版事業が、今後の讀書社會の上に現はれて來ようとしてゐる實際の傾向と全然齟齬する結果に陷つて、そしてさういふ冒險的出版業者等の失望を跡に殘したまゝ、稀薄な空氣の中に消え入つてしまふのであるかも知れない。しかし、さういふことのすべてを考慮の中に入れても尚は、社會科學の全般に對

する興味が、漸次に讀書社會の一部に於て動きつゝある徴候が感じられるといふことが、全然不當だといはれないのである。

出版業者等が、この際社會科學に關する著譯を幾分盛に刊行しようとする傾向が見えてゐるのは、無論それに對する需要を見越しての上のことである。彼等は或ひは、その需要の程度の測定に於て、違算をしてゐるかも知れない。けれども、さういふ需要が幾分でも存在してゐるといふ事實に至つては、彼等は必ずしも見込み違ひをしてゐるとはいへないやうに考へられるのである。そして、若し彼等が、その需要の程度の測定に於て違算をしてゐるとすれば、その結果は彼等が物質上の損失の憂目を見るといふことだけに止まるのであつて、我々の利害には一向無關係なことである。けれども、如何なる程度に於てゞにせよ、さういふ需要があるといふ事實は、彼等の物質上の利害とは全然異がつ

た見地から、我々に取つては、心から歡迎すべき事柄であることを失はないのである。少くともそれは、讀書社會の或る一部に於て、社會科學に對する興味なり、注意なりが喚び醒まされた事實の一指標として、この方面で勞作してゐる我々に向つて、多大の刺戟なり、奬勵なりを與へると共に、或る滿足感をも齎らすことを誤らないものである。

二

といふのは、我々が學術とか思想とかの生活に於ても、我々と共同の興味を感ずるもの丶範圍の擴大に對して喜びを持つことは、我々の生活の他の方面に於けると少しも異がつたところはないからである。それは、我々にとつては、矢張り一種の共同利害範圍(interest community)の擴大を意味するものであ

る。我々は、すべての事業の遂行に際して所謂『同志』を求める傾向を持つてゐる通りに、學術とか思想とかの研究に際してもまた、同様の衝動を感じるものである。無論我々が、學術とか思想とかの方面を開拓するに際しては『同志』の有無に依つて、我々自身の努力を加減しようとするものではない。我々は、さういふことには、一切無頓著で我々の研究を進めて行くつもりではゐる。けれども、それは我々の主觀的態度だけに止まるものである。客觀的事實の上かちいへば、學術とか、思想とかの方面に於ても、我々の努力の出し方が『同志』の有無に依つて左右せられるものであることは、我々の生活の他の諸方面に於けると全然同一の徑路を辿るものである。我々は、動々もすれば、我々の學術とか思想とかの生活を、他の方面に於ける我々の生活と切り離して考へたいやうな傾向に陷り勝ちな性癖を持つてゐる。けれども、それは、思惟とか知識と

かを、日常生活上の他の諸要素よりも、一段と高いところに祭り上げる習慣を我々に吹き込んだところの、過去に於ける官僚式教育の餘弊である。手短かにいへば、それは私の所謂『概念崇拜』若しくは『知識崇拜』の迷信の遺産である。實をいへば、我々にとつては、學術とか思想とかの方面に於ける探究の仕事もまた、我々の生活である。それは、我々の全生活の一部分である。そして、それは我々の全生活の一部分であるといふことに依つて、根本に於ては、我々の全生活の他の諸部分と同樣の性質を持つてゐるものでもあれば、同樣の動機に驅られるものでもあり、また同樣の原則に支配されるものでもある。

社會學說の方面に於て、集團の地位が段々に認識せられる樣になつたのは、最近に於ける顯著なる傾向の一つである。そして、それは、實際の社會生活

事實に最もよく適合してゐる說明である。それは、その根柢に於ては、各個人の生活の各方面が、或る點に於て、社會生活若しくは集團生活と交涉を持つてゐないものはないといふ事實の認識から出發してゐるものである。この意味に於て、各人のすべての個人的生活は、社會生活若しくは集團生活に織り込まれてゐるものであり、從つて各人のすべての個人的行爲は、社會的若しくは集團的性質を帶びてゐるものである。我々の學術とか思想とかの方面に於ける生活にしても、決してこの原則に對して、例外をなしてゐるものではない。我々は、動々もすれば、學術とか思想とかの方面に於ける我々の仕事の個人的方面を强調し勝ちになる。そしてこの傾向は、殊に藝術の方面に關して最も强く現はれるのが普通である。即ち、我々はこれ等のものが、個人的創造に係はるものであるといふことを自ら考へもし、またさういふことをいふ人々の立場を肯

定しようとする誘惑に陷り勝ちである。けれども、それ等が個人的創造に係はるものだといふ時、既にそれらがその或る部分に於て社會的若しくは集團的性質のものだといふことが少くとも間接に意味せられてゐるのである。それは、如何なる人々の個人的生活も、社會的若しくは集團的生活から孤立しては成り立ち得ないといふ社會的知識のＡＢＣともいふべきものの理解から來る當然の歸結である。

理論はどうであるにせよ、事實上に於ては、我々は學術とか思想とかの方面の我々の生活の上に於ても、意識的にも無意識的にも、『同志』の範圍の擴大に努力する習性を持つてゐるのである。そして、この方面に於ても『同志』を發見し得ない場合の我々の寂しさは、聽衆を持たない壇上の辯士の寂しさに等しいものであることを痛感するのである。そして、その寂しさの反對が『同志』

共同利害範圍の擴大の喜びである。しかしながら、この共同利害範圍の擴大は、單にかういふ感情的滿足を我々に齎らすだけに止まるものではない。それは同時にまた、この方面に於ける我々の仕事の能率を高める效果をも擧げるものである。それは、この方面に於ける我々の仕事に對して、理解ある同情、理解ある奬勵、理解ある批判、理解ある競爭——約めていへば、すべてのかういふ形式に於ける理解ある協力及び分勞——の機會を可能にするものである。連帶的從業（team-work）の效果は、遊技の場合に現はれる通りにまた、生産工程の上に現はれる通りに、この方面の仕事の上にも充分に發揮せられるのである。經驗ある敎育者は、學校に於ける組敎授が、家庭に於ける個人敎授よりも遙かに大なる能率を擧げるといふ事實を我々に報告する（註一）。

學問の生活を、他の生活の諸相よりも、遙かに高く標置してゐた、昔の東洋流の儒者たちも、時には『知己を千載に求める』といつたやうな瘦せ我慢をいはなければならない程の心の空虛を感じたこともあつたらしく、少くとも所謂『切瑳琢磨』の功能を强調することに依つて、學問の生活もまた、集團生活(group-life)であるといふことを認めてゐたのである。少くとも彼等は、問ふに落ちずして、語るに落ちた形ちになつてゐたのである。けれども我々は、寧ろ積極的に進んで、この點を力說しようとしてゐるのである。

(註Ⅰ)「ドイツのヴュルツブルグ市のマイヤー博士(Dr. Mayer)は、同市に於ける小學校(Volksschule)の第五學年の學童に關して、彼等が個別的によりも寧ろ集團的に、優秀なる學業成績を擧げてゐることをいつてゐる」。——Todd, Arthur James *Theoris of Social Progress*, 1919 p.49.

三

かういふ譯であるから、最近に於て社會科學に對する興味が、讀書社會の一部に於て、或る程度に動きかけた徵候が感じられるといふことは、如何なる點から見ても、社會科學の一分野の開拓に從事してゐる私たちに取つては、或る程度に於ける滿足感を以て迎へなければならない事實である。それは、私たちに取つては、一方に於て、私たちが研究の結果を訴へ得る範圍の或る程度に於ける擴大を意味するものでもあれば、また、他方に於て、私たちが研究上の協力者を求め得る範圍の或る程度に於ける擴大を意味するものである。手短かにいへば、それは社會科學の方面に於ける勞作者としての私たちの共同利害範圍の或る程度に於ける擴大を意味するものである。

固より、或る立場からいへば、單に社會科學の場合のみならず、自然科學の方面に於ける研究が進步したり、それに對する興味が增大したりすることもま

た、一般の學術の進歩といふ名目の下に於て、私たちの共同利害範圍の或る程度に於ける擴大を意味するものだといへないではないが、しかしそれは、何といつても、私達に取つて幾分、間接的の意味に於てゞあることは無論である。尤も、それが間接的の意味に於てであるといふことは、私たちがその價値を輕視してもいゝといふ譯ではない。學問の發達の順序からして、自然科學の基礎となつてゐるものである以上は、その方面に於ける如何なる種類の進歩にせよ。私たちの立場から見ても、それに無關心であり得ないことは確かな事實である。けれども同時に、さういふことは、社會科學の方面に於ける研究の進歩なり、それに對する興味の増大なりが、私たち自身に取つて一層直接的の意味があるものだといふことを妨げないといふことも、また同様に判り切つた事實である。

それは兎も角、右に揭げた社會科學に對する興味の增進の徵候は、或ひは、一時的の流行であるかも知れない。誰れがさうでないといひ得よう？　否、私自身の感じてゐるまゝをいへば、さうでないといひ得る根據よりも、さうだといはなければならない根據の方が、寧ろより有力なものであるとさへも考へられるのである。けれども、それが一時的の流行に止まるものであらうといふことも、私たちに取つて、決して絕望すべきことではない。寧ろそれ以上を望むことが、我々の側に於ける無理な要求だとさへいひ得られるものだと考へられるのである。といふのは、一概に一時的の流行といつても、それは如何なる場合に於ても、それが過ぎ去つた跡に何等の痕跡をも止めないで消滅すると限つたものではないからである。多くの場合に於てそれは破壞的か建設的かの仕事の基礎を殘して過ぎ去ることもあるのである。それは、時としては、曾つてヨ

ーロッパを蹂躪した韃靼人の大軍が累々たる廢墟の連續をその跡に殘したやうに過ぎ去ることもあれば、また嘗てナイル河畔を溢れて氾濫した洪水が、一帶の沃土を兩岸に止めて引いて行つたやうに過ぎ去ることもあるのである。かういふ二つの場合に該當するやうな實例を際限もなく列擧することは、容易に企て得られることであるが、それは、私の差し當つての問題ではない。私は寧ろ私の問題に密接なる關係があるものとして、數年前に於ける勞働問題及び社會問題の方面の讀み物の流行を回顧して見度い。

一面からいへば、それは如何にも、忽ちにして來り、忽ちにして去つた流行であつたやうに見える。と言つて、それは決して、何等の永續的影響をも殘さないで過ぎ去つたものだとは、言はれないのである。いかにも、あの頃には、勞働問題とか社會問題とかを標榜してゐた讀み物でありさへすれば、殆んど如

何なるものでも、多くの讀書人たちの購買欲を唆つた趣きがあつた。そして彼等は、彼等自身の消化力を顧みる遑もなければ、彼等の前に提供せられる讀み物に含まれた營養價値を吟味する遑もなかつたかのやうに、たゞ無闇に流行題目を追つ駈ける競走に後れを取るのを虞れたやうに見えた。その結果は、勞働問題とか社會問題とかに關係のある讀み物とさへいへば内容價値の如何を問はず、それらの殆んどすべてが皆相當の當りを取つたやうな狀況を出現せしめたのであつた。ところが。今日となつて見れば、さういふ種類の讀み物のさういふ無差別的な全盛期は、最早疾くに過ぎ去つた夢となつてしまつて居るのである。

けれども、勞働問題とか社會問題とかに對するすべての讀書人たちの興味がそれと共に、盡く永遠に過去のものとなつてしまつてゐるかといへば、決して

さうではないのである。手短かに言へば、今日に於ては、縦しその頃に比べると非常に少数になつてゐるにせよ、兎も角比較的眞面目な態度でさうした問題に對してゐる人々だけが、その自ら手にしようとする讀み物の上に、比較的に分別ある選擇を行ひつゝ、依然としてその興味を持續してゐるといつたやうな狀況が、一部に於てたしかに殘留して居るのである。從つてまた、さうした問題に關する讀み物を供給する側に在る人々の上にも、それに應じた自然淘汰が或る程度に行はれてゐて、比較的に眞面目な研究者たちの勞作に成るものだけが、主としてそれらの讀者たちの需要を充たすやうになりつゝあるといつたやうな傾向さへも、漸次に現はれ始めて居るやうにさへも見えられるのである。もとより、さういふ傾向が現はれ始めてゐるといつたところで、その傾向は、私達が私達の立場から希望してゐる程度にまで達するには、尙ほ餘り

に遙かな距離に置かれて居るものである。それは、我々が虚心坦懐に認識しなければならない事實である。が、同時にそれは、一個の傾向としては、私たちがそれに對して私たち自身の眼を塞ぐことが出來ないやうな種類のものである。

四

若し、私が本文の始めに觀測した通りに、全般の社會科學に對する興味が、漸次に讀書社會の一部に於て喚び醒まされつゝある徴候が現はれてゐるといふことが間違つて居ないとするならば、それは恐らく、右の勞働問題及び社會問題關係の讀み物の數年前に於ける流行の歸着點であらうと考へられるのである。が、我々が、あの頃を起點として最近の社會科學の流行の曙光を見る段

階に達したまでには、我々は、その間に、尚は他の樣々の種類の流行が、次から次へと現はれて來て、我國の讀書社會の上に忙しく出沒去來したのを見たのである。私は到底、それらのものを一々列擧するといつたやうな煩累に堪へないが、しかしそれらの中の最も顯著なものだけを手當り次第に示すことにしても、『軟文學』の方面では、或る時は宗敎小說のやうなものが世間に歡迎されて所謂『親鸞もの』の全盛期が來たこともあれば、それが稍々下火になりかけると、半ばはその繼續として、そして半ばはそれに對する反動として、性慾もの——殊に變態性慾もの——が、それに取つて代らうとしてゐる徵候が現はれて居るやうに見えるのである。そして、我々は、尚ほそれに關聯して、今後に於ては、頽廢的空氣を描寫したものとか、異端讃美的思想を强調したものとかが、或る程度に於てその地步を占めるであらうことを豫想することも、必ずし

も根據のない臆斷だと決めてしまふことが出來ないのである。かういふことのすべては、それぞれに皆、現代の社會生活相の或る斷面を反映してゐるものであつて、そして、それらが時々の狀況に應じて表面に現はれて出るのは、決して偶然ではないと考へられる理由があるのである。

若しまた我々が、多少硬質を帶びた部類の讀み物の方面を見るときには、我々はそこにもまた、勞働問題や社會問題やに關する讀み物の流行の後を受けて、或る時は哲學上の、或る時は自然科學上の讀み物が、順次に交替して流行時代に入つた跡が、明かに印せられてゐるのを見るのである。尤も、かういふ方面に於ける各種の讀み物は、『軟文學』の方面に於けるそれらと比較すれば、如何に流行期に在る場合でも、其程度範圍に於ても、また其外觀の花々しさに於ても、非常に狹く限局されてゐるものである。これは恐らく、その一半は、さ

ういふ種類の讀み物自身の本質にも基因してゐるものであらうが、その一半はそれらのものが、『軟文學』の大抵のものの場合に於て見られる通りに、婦人仲間の讀者を、殆んど全然といつていゝ程度に於て有して居ないといふ事實から來て居るものでなければならない。我國の通常の婦人たちの受けて居る敎養の程度の影響が、かういふところにまで波及して居るといふことは、或る種の興味のある社會現象の一つとして注意すべきものである。

が、それは兎に角、硬質の部類に屬する讀み物の場合に於てはそれらの、各個の流行といつたものにしたところで、あらゆる意味に於て、非常に限局せられたものである。といふことだけは爭ふべからざる事實である。しかしながらそれと同時に、さういふ種類の讀み物の流行は、大體の場合に於ては、その全盛期が去つた後に於ても、ある永續的の――そして或る意味に於ては建設的

の――影響をその跡に殘留せしめて行くものだといふこともまた、我々が公平に認めなければならない事實である。

私は前旣にこの點を、勞働問題及び社會問題關係の讀み物の流行に關聯して一言した。が、私は、同樣のことが、右に揭げた哲學上及び自然科學上の讀み物の流行に關聯しても、同等の强さを以て言ひ得られると考へるのである。尤も、自然科學上の讀み物の場合に在つても、例のアインシュタイン博士が我國を訪づれた時の前後に於て、相對性原理に關する諸著作が空前の盛況を以て刊行せられて、そしてそれが羽が生えたやうに世間の中へ飛んで行つたものの、やがて博士が我國を去つてからは、それらの大抵のものが、一時に火の消えたやうにパッタリと市場から影を潛めたやうなこともあつたが、しかし、さうこふことは、原則だといふよりは、寧ろ例外――それも例外中の例外――だ

といふべきものである。しかも、この場合に於ても、多くのアインシュタインに對する盲目的渇仰者たち――知識の『魔力』に對する無邪氣な迷信からの――が、相對性原理の解說書を早くも高閣に束ねて居る傍らには、無論極めて少數には違ひないが、今尙ほその硏究若しくは理解のために腦漿を絞りつつある幾人かの眞面目なる學徒が、その置土產として我々の間に殘されてゐるに違ひないといふことも、また全然考へられないことではない。私自身はアインシュタインの學說には全然無知な一人ではあるが、しかし、これだけのことは、想像として言つても差支へはないと考へる。

けれどもアインシュタインの來訪の影響はどうであるにしても兎に角、一般の哲學上及び自然科學上の讀み物の場合に於ては、勞働問題及び社會問題關係のそれらの場合と同樣に、さういふものの外觀上の流行が去つた後でも、

何等かの永續的影響がその跡に殘留するものであつて、且つまた、さういふ影響が或る意味に於て建設的效果のあるものだといふことすらも、豫想し得られるものであるやうに、私には考へられるのである。しかのみならず、右の哲學上及び自然科學上の讀み物の場合に於ては、今のところでは、その外觀上の流行すら、まだ全然過ぎ去つて居るものでなく、殊に自然科學上のそれらの場合に於ては、それが尙ほ今後に向つて上昇の途上にあるものとも見られるのである。

五

數年前に於ける勞働問題や社會問題やに關する際物的讀み物の空前の盛況は今では一場の夢と消え去つたものとなつてゐる。けれども、その時に播かれた

種子は、その儘死んでしまはなかつたことは事實である。換言すれば、その頃新に喚び醒まされた勞働問題や社會問題やに對する世人の興味は、今に至るまで失はれないで殘つてゐるばかりではなく、益々底力の強いものとならうとしてゐるやうにも見られるのである。如何にも、それは、その頃の噪狂性を失ひ外面上の花やかさを失つてゐることは事實であるが、しかしその頃よりは一層内面的にもなつて居れば落ち附きをも增して居るし、且つ全體に於て、幾分は實質的にさへなつて居るやうに見られるのである。從つて、この方面の讀み物の上にも、前に述べた通りに、この狀況に應じて、或る意味に於ける陶汰が行はれるやうになつて來たのである。

無論、かういふ傾向は、その基礎となつて居る社會的事件の進み方に伴れて動くものである。我々が今にして、世界大戰勃發の當時の我國の思想界を振り

返つて見ると、その頃は、政治上のデモクラシーが盛に論壇を賑はして居たものであつて、私自身その論爭の中に參加した覺えがある。けれども、その頃は今日に比較すると、一般に社會問題に對する興味が非常に稀薄であつて、從つてそれに對する理解が非常に缺乏してゐた。ところが、そのうちに、我國の內部に於ても、勞働問題を始め、各種の社會問題が、次から次へと引切なしに、事實として現はれかけたことは、縱し諸外國と程度を異にしてゐたにせよ、その經路を一つにしてゐたのであつた。そして、勞働問題や社會問題やに對する興味が俄かに喚び醒まされ社會主義的思潮が猛烈に擡頭し、從つてこの傾向に應ずる樣々の際物的讀み物が、眞面目にかゝれた著作の間に交じつて、玉石混淆的に際限なく、濫發されたのがそれ以來であることは、誰れもの記憶の上に尙ほ新たな筈のことである。

今日になつてみると、さういふ際物的讀み物は、大抵は『時』の手に依つて篩ひ落されて、どこかへ飛び散つてしまつたが、併し、比較的に眞面目な――若しくは眞面目だと思はれてゐる――著作は、それらと共に全然存在の根據を失つたものとはなつてゐないのである。しかし、それは兎も角のことゝして、

私の當面の問題に直接的な關係のあることは、さういふ時代に培はれた勞働問題や社會問題やに對する興味の芽生えは、行く行くは、社會そのものゝ機構及び作用の本質幷びにそれに伴ふ諸現象の種々相――若しくは簡單にいへば、社會活生及び社會現象――の科學的研究から得られた知識の方に赴くき必然性を持つて居たものであるといふことである。そして、さういふ知識を供給し得る地位にあるものは、全般の社會科學を措いて、外にないのである。

一旦勞働問題や社會問題に對して興味を喚び醒まされたものが、早晩は、さ

ういふ問題の活現される場面である社會生活そのものに對する科學的知識を得ようにする欲求を起すやうになるのは、自分が興味を持つものを理解しなければ已まれないやうな衝動に驅られる、人間の本然の性情から來たものである。それは、好いにせよ、惡いにせよ、自發的に起つて來る欲求に根ざして居るものである。無論、或る事物の科學的知識の追求といつた樣なものは、それに關する安易な通俗的解釋とは異がつて、それに對して眞底からの興味を感じるものゝ範圍が非常に限局せられるやうになるのは、避け得られないことである。それ故に、全般の社會科學に對する興味が漸次に讀書社會の一部に擡頭しつゝある徵候があるといつたところで、その範圍が大したものに出でないであらうといふことは、今のうちから充分に豫測することが出來るのである。それ故に、假りに今後、全般、社會科學の方面の讀み物が多少流行するやうになる

にしたところで、その範圍は到底、數年前に於ける勞働問題や、社會問題關係の讀み物の流行や、その後に於て行はれた所謂宗教小說乃至『親鸞もの』のそれとか、現在でも尙ほ行はれてゐるやうに見られる變態性慾小說のそれに比較が出來るものになる氣遣ひはないであらう。そればかりでなく、社會科學のどの部門に關する讀み物にしても、苟しくもそれらが科學的といふ名に値ひするほどの態度で書かれたものである以上は、どれ程通俗的に表現されてあつても、大體の上からいへば、始終新聞雜誌の上に現はれて來る氣分本位の社會論ほどにすら、讀者を牽き附け得るか否かさへが、疑はしい位に考へられるのである。

六

それにも拘はらず、我々は、全般の社會科學に對する興味が、縱し非常に狹く限られたる範圍內に於てでにせよ最近に於て漸次に喚び醒されつゝある徵候を或る滿足感を以て迎へる理由を持つてゐるのである。もとより、それはまだ流行といふ程度には達してはゐないし、また縱しそれが今後或る程度に於て流行の氣運に向ふにしたところで、その範圍が極めて狹いものであらうといふことばかりでなく、それが一時的現象として見られるに止まるであらうといふことすら、略ぼ見當がつくやうに考へられるのである。しかし、それはそれでも構はないのである。といふのは、縱し假りにそれが一時的現象として過ぎ去るにしても、それは必ずそのあとに、何等かの永續的の――そして或る意味に於て建設的の――影響を殘留せしめるであらうといふことが、我々には當然のことゝして考へ得られるからである。換言すれば數年前に於ける勞働問題及び社

會問題關係の讀み物の流行に依つて喚び醒まされた興味が、漸次にその範圍を狹ばめられながらも、或る程度に强き底力を以て、徐々に社會生活及び社會現象の科學的知識に對する興味に成長して行つた通りに、今日に於てこの方面に喚び醒まされた興味は、將來に於て、更らに全般の社會科學の堅實なる進步を促す動因となる可能性があることが、我々には、當然のことゝして豫想され得るのである。少くとも、それは、我々の心の上に、さういふ希望を植え附けるだけの効果を、たしかに持つてゐるのである。

いふまでもなく、今日の世界に於ける社會科學は、自然科學とは到底比較にならないほどの幼稚な狀態の上に在るのである。これは、一つには近代の社會科學の發達の始まつた時期が、近代の自然科學のそれの始まつた時期よりも遲れたことからも來てゐるのであるが、また一つには、その對象である社會生

活及び社會現象の性質の非常に複雜でもあれば、非常に可變的でもあるところから來てゐるのである。かういふ原因から、社會科學は一般に自然科學よりは進歩が遙かに遲れたまゝで、今日に及んで來てゐるのである。殊に我國に於ては、自然科學の方面の進歩もさうだが、更らに社會科學の方面になると、その研究の行はれてゐる程度及び範圍が、少しも言ふに足るほどのものがないのは、誰もが腹臟なく承認しなければならない事實であつて、しかもこのことは、社會論が可なりに流行して居る今日に於ても、そのまゝ何の制限句なしに言ひ得られることなのである。かういふ環境の下に於て、駑馬に鞭うちながら社會科學の方面の小さき一分野で勞作してゐる私達に取つては、我國に於て社會科學の基礎である自然科學が進歩することが望ましいのは無論であるが、更らに社會科學そのものの進歩が、一層直接なる意味に於て望ましいこと

なのである。それ故に、最近に於て、全般の社會科學に對する興味が、縱し甚だ微少な程度及び範圍内に於てでにせよ、漸次に喚び醒されつゝあるやうに見えるのは、私達に或る程度に心強い氣持ちを起させるのである。

殊にそれは、私達に取つては、それだけづつ私達の共同利害範圍（interest community）の擴大を意味するものである。たゞ、この『共同利害範圍』といふ、極めて誤解を受け易い言葉に就いては、茲で一言を附け加へておく必要がある、學術の進歩に關する利害關係（interest）は、本質的には、經濟上の利害關係とは異つて、決して排他的のものでもなければ、獨占的のものでもないのである。それは、學術上の知識を享受する側に關しても言ひ得られる通りに、それを供給する側に關しても言ひ得られるのである。學術上の知識を享受する側の範圍が擴大すれば、それだけ學術の進歩の刺激が加はる譯であり

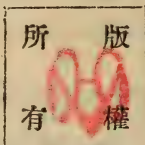
またそれを供給する側の範圍が擴大すれば、それだけその研究上の協力及び分勞が完全になる譯である。たゞ、學術上の知識の修得及び供給に經濟上及び社會的地位上の意味が加へられる時に於てのみ、少くとも學術上の知識を供給する側に屬するものゝ共同利害關係が排地的になり、獨占的になるといつたやうな、眞の意味に於ける學術の進步には有害な現象が生じて來るのである。しかも、この現象は、今日の社會組織の下に於ては、普遍的に見られてゐるものである。が、眞の意味に於ける學術上の進步を企圖するものゝ立場から見れば、學術上の知識の享受に關しても、またその供給に關しても、全社會がその共同利害範圍となるといふことが、最も望ましい境地なのである。それ故に眞の意味に於ける學術上の進步を企圖するものゝ眼には、今日の社會組織はその存續を許すべからざるものとして映ずることになるのである。

この點へ來ると、私は社會科學上の知識そのもの丶社會運動の武器としての地位及び意味の問題に觸れなければならないのである。それは主として、社會科學が敎へる社會法則と、社會運動上のイディオロジーとの關係を中心とするものである。無論これらの兩者は同一物ではないが、しかしその間に密接なる相互關係のあるものである。けれども、この問題は私が既に拙著『政治の社會的基礎』の序論『現代の社會的諸傾向と政治學との交渉』の中に取扱つた、殊にその第四章『社會心理的現象と科學的社會思想』の項下に於て）問題であるから、私は重複を避けるために、こゝではそれを省略することにする。

民族と階級（畢）

大正十二年六月十日印刷
大正十二年六月十五日發行

〔定價金七十錢〕

著者　大山郁夫
東京市神田區錦町三ノ一六

發行者　三和一男
東京市神田區錦町三ノ一六

發行所　科學思想普及會
東京市神田區錦町三ノ一六
電話神田三七九二

印刷所　明治印刷株式會社
東京市神田區松下町七
印刷者　佐藤磨

發賣所
科學思想普及會
東京市神田區錦町三ノ一六
振替東京四四三八八番

巖松堂書店
東京市神田區仲猿樂町一
振替東京六五五六番